

武田城下町遺跡Ⅹ

(甲府市大手二丁目 4049 番 他地点)

— 宅地造成に伴う発掘調査報告書 —

2017

有限会社 竜王土地
甲府市教育委員会
昭和測量株式会社

武田城下町遺跡 X

(甲府市大手二丁目 4049 番 他地点)

— 宅地造成に伴う発掘調査報告書 —

2017

有限会社 竜王土地
甲府市教育委員会
昭和測量株式会社

序

今から遡ること約 500 年前の永正 16 年（1519）、甲府盆地北縁部の相川扇状地に武田信虎が館を築いたことにより「甲斐府中」として甲府の礎は築かれました。信虎は家臣を集住させ、現在の甲府駅北口周辺まで家臣屋敷・町屋・寺社などが建ち並ぶ、武田氏三代にわたり繁栄した中世の城下町でした。その繁栄は、近世の甲府城下町、さらに明治時代以降は県都として、政治・経済・文化の中心とし受け継がれ、現在の甲府の発展につながり、2年後の平成 31 年には開府 500 年を迎えます。

本書は相川扇状地中央部の大手 2 丁目地点の発掘調査報告書です。調査区周辺は、武田家重臣の小畠虎盛、小幡昌盛、山県昌景などの屋敷の伝承地であり、調査区西側を通る通称「鍛冶小路」は 16 世紀代からの通りとして、武田城下町の名残であります。

今回の調査では、鍛冶が行われていた痕跡を示す鉄滓などの遺物とともに、戦国時代の小路の痕跡が確認されるなど、今後の中世城下町の構造の解明する上で貴重な発見がございました。

今後これらの資料が歴史解明の一助となるとともに、郷土の文化・歴史をよりよく理解する場として、今後学校教育・生涯学習教育の場として有効活用していただければ幸甚です。

末筆となりましたが、このような貴重な遺跡発掘調査が実施できましたのも、ひとえに土地所有者並びに関係者皆様方の理解・協力の賜物であり、今後ともご支援・お計らいを賜りますように、お願い申し上げます。

平成 29 年 3 月

甲府市教育委員会
教育長 長谷川義高

例 言

1. 本報告書は、山梨県甲府市大手二丁目 4049 番 他に所在する武田城下町遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は有限会社 竜王土地による宅地造成工事に先立って実施されたもので、有限会社竜王土地、甲府市教育委員会、昭和測量株式会社の間で三者協定を締結し、甲府市教育委員会の指導・監督・助言のもと昭和測量株式会社が発掘調査および整理作業を行った。
3. 本調査に関わる費用は有限会社竜王土地が負担した。
4. 発掘調査は平成 28 年 2 月 25 日～3 月 26 日にかけて実施し、整理・報告書刊行業務は平成 28 年 3 月 29 日～平成 29 年 3 月 31 日まで実施した。
5. 発掘調査および本報告書の執筆は、
第 1 章 調査に至る経緯を志村憲一（甲府市教育委員会）が担当し、第 2 章から第 6 章と全体の編集を小谷亮二・萩野谷主税（昭和測量株式会社）が担当した。
現場調査および整理作業にあたっては新津健（昭和測量株式会社）の助言を受けた。
遺物の実測は、小澤美幸・齋藤里美、トレースは小谷が行った。
遺物写真は、小谷が撮影を行った。
6. 本報告書で使用地図は、国土地理院発行の「甲府」（1:25000）を使用した。
7. 遺跡における X、Y 座標は世界測地系座標を使用している。
8. 土器に付着した熔融物は、公益財団法人山梨文化財研究所の藤澤 明氏・三浦麻衣子氏のご厚意により鑑定、ご教示をいただいた。
また、平成 28 年 3 月 18 日には甲府市立北東中学校第 2 学年による遺跡見学会が行われた。実際に現場で調査成果を見る事で、今後さらに興味を持つ若い世代が増えるのではないかと思い、そのような機会を作って頂いた学校関係者の方々に感謝の意を表します。
9. 調査体制
発掘調査 現場担当者：小谷亮二 萩野谷主税
発掘調査参加者：長田秋文 北村透江 土屋常子 内藤敏夫 望月孝次
整理作業担当者：小谷亮二 萩野谷主税
整理作業参加者：小澤美幸 齋藤里美
10. 本調査における図面・写真・遺物はすべて甲府市教育委員会で保管している。

凡 例

1. 遺構・遺物の挿図縮尺は、各挿図中に記載した。
2. 写真図版の縮尺は任意である。
3. 水系レベルの数字は海拔高を示し、単位はメートル (m) である。
4. 土層断面、遺物観察表中の色調は『新版標準土色帖 1990 年版』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に基づいた。

本文目次

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 遺跡の立地と歴史的環境	
第1節 遺跡の立地	1
第2節 歴史的環境	1
第3節 武田城下町	7
第4節 過去の武田城下町遺跡の調査	9
第3章 調査の方法	15
第4章 調査の概要	
第1節 検出状況	15
第2節 土層断面	15
第5章 検出遺構	
第1節 石積み・石列遺構	18
第2節 溝状遺構	18
第3節 土坑	18
第4節 ピット	19
第6章 出土した遺物	19
第7章 まとめ	20
引用・参考文献	22

挿図目次

第1図 遺跡位置図	2
第2図 調査区周辺の地形（「提供 国土地理院」1947年11月21日撮影）	3
第3図 地籍図と調査区（トレースした地籍図に合成）	4
第4図 古府之図（『甲府略史』に小路名称を記載）	5
第5図 周辺の遺跡分布図	6
第6図 武田城下町遺跡の過去の調査	11
第7図 遺構分布図	16
第8図 調査区の土層断面図	17
第9図 石積み・石列	23
第10図 1号溝状遺構（SD1）上面の礫検出状況	24
第11図 1号溝状遺構（SD1）	24
第12図 2号溝状遺構（SD2）上面の礫検出状況	25
第13図 2号溝状遺構（SD2＝暗渠）	25
第14図 土坑	26
第15図 ピット	27
第16図 遺物出土地点図	28
第17図 遺物実測図（1）	29
第18図 遺物実測図（2）	30

表目次

表1	周辺の遺跡名一覧	8
表2	武田城下町遺跡の調査成果(1)	12
表3	武田城下町遺跡の調査成果(2)	13
表4	武田城下町遺跡の調査成果(3)	14
表5	鉄滓類の分類表	21
表6	溝状遺構計測表	24
表7	土坑計測表	26
表8	ピット計測表	27
表9	遺物観察表(1)	31
表10	遺物観察表(2)	32

写真図版目次

写真図版1

1. 調査区遠景 武田氏館跡を望む(南東から)
2. 調査区(Ⅲ区)
石積みと現在の路地(北から)

写真図版2

3. 調査区全景(上から)

写真図版3

4. 調査区全景(南西から)
5. 調査区全景(南東から)

写真図版4

6. Ⅲ区全景(西から)
7. 石積み・石列全景(南東から)

写真図版5

8. 石積み全景(北東から)
9. 石積み全景(北から)

写真図版6

10. 石積み(真上から)
11. 石積み正面(東から)
12. 石積み裏込め(南西から)
13. 石列(東から)

写真図版7

14. Ⅲ区北壁土層断面
15. Ⅲ区東壁土層断面
16. Ⅲ区南壁土層断面1
17. Ⅲ区南壁土層断面2

写真図版8

18. Ⅲ区北東隅石列検出状況(東から)
19. Ⅲ区北東隅石列検出状況(北から)
20. 石積み前サブトレンチ全景(北から)
21. 石積み前サブトレンチ東側(北から)
22. 石積み前サブトレンチ西側(北から)

写真図版9

23. Ⅱ区北壁土層断面(南西から)
24. Ⅱ区南壁土層断面(北東から)

25. 1号溝状遺構上面の礫(南から)

26. 1号溝状遺構上面の礫(南東から)

写真図版10

27. 1号溝状遺構上面の礫中から出土した鉄滓と炉壁(1)(北から)

28. 1号溝状遺構上面の礫中から出土した鉄滓と炉壁(2)(西から)

写真図版11

29. 1号溝状遺構北壁土層断面

30. 1号溝状遺構(西上空から)

31. 1号溝状遺構内から検出した石列(南西から)

写真図版12

32. 2号溝状遺構上面の礫(北から)

33. 2号溝状遺構上面の礫(東から)

34. 2号溝状遺構遺物出土状況(南東から)

35. 2号溝状遺構(暗渠)北壁土層断面

36. 2号溝状遺構(暗渠)(西上空から)

写真図版13

37.SK6(北東から)

38.SP4 土層断面と礫検出状況(北東・北西から)

39.SP5 土層断面と礫検出状況(北東・南西から)

40.SP7(左)・SP6(南東から)

41.SP8 土層断面(東から)

42.SP9(東から)

43. I区西壁土層断面

44. I区北壁土層断面

写真図版14

45. I区全景(西上空から)

46. 作業風景

47. 北東中学校現場見学会

写真図版15

遺物写真

写真図版16

遺物写真

第1章 調査に至る経緯

宅地造成に伴い調査対象面積 3767.61m² について平成 27 年 9 月 3 日に東亜測量設計株式会社から地権者 4 名の代理として文化財保護法第 93 条の届出が提出され収受された。同年 9 月 8 日に第 93 条の届出を山梨県学術文化財課へ提出、9 月 25 日山梨県学術文化財課より 93 条届出に対しての通知が届き収受した。9 月 30 日県からの通知文書が施行され代理人の東亜測量設計株式会社に渡した。

平成 27 年 10 月 15 日～11 月 5 日まで甲府市教育委員会生涯学習文化課において全体の 3.5% にあたる 133m² の試掘調査を行い、遺構の検出及び遺物の出土を確認した。

10 月 19 日東亜測量設計株式会社へ遺構・遺物が確認された事を連絡、10 月 21 日東亜測量設計株式会社が現場確認を行い、全関係者（甲府市教育委員会、地権者、関係業者（東亜測量設計株式会社、有限会社竜王土地、有限会社北宝エステート）による現場確認を 10 月 28 日、11 月 5 日の 2 回行った。10 月 28 日の現場確認においては、遺構・遺物の検出・出土状況の説明、本調査が必要となる区域、経費等の説明および新たに、調査範囲を確定するためにトレンチを拡張する必要がある事について話し合いが行われた。11 月 5 日においては、拡張したトレンチの調査結果および本調査が必要な範囲等の話し合いが行われた。11 月 16 日有限会社竜王土地に試掘調査終了報告書を提出した。

本調査に際しては、有限会社竜王土地が昭和測量株式会社との間で業務委託契約を交わし、有限会社竜王土地、甲府市教育委員会、昭和測量株式会社の三者間で三者協定を締結した。昭和測量株式会社は平成 28 年 1 月 14 日に山梨県教育委員会へ文化財保護法第 92 条第 1 項に基づく届出を行い、山梨県教育委員会より 1 月 15 日付で通知があった。平成 28 年 2 月 26 日から平成 28 年 3 月 26 日の期間において甲府市教育委員会の指導監督の下、昭和測量株式会社が本調査を実施した。

調査終了後は山梨県笛吹市石和町に所在する昭和測量株式会社文化財調査課埋蔵文化財整理室に出土遺物および調査記録図面を移動して整理作業と報告書執筆作業が実施された。

委託業務名は、「武田城下町遺跡（甲府市大手二丁目 4049 番 他）埋蔵文化財発掘調査業務委託」である。

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

第1節 遺跡の立地

調査地点の地形が所在する相川扇状地は、調査地点の西側を南に流下する相川によって形成された。相川は甲府盆地の北部山地（奥秩父山塊に続く太良峠）を源とし、現在は寿町で荒川と合流し甲府盆地を南流した後、笛吹川と合流する。なお遺跡の東側を南西に流下する藤川は濁川に合流する。

さらに、南を除く三方は、北西に位置する要害山をはじめとする山々に囲まれ、東西は藤川、相川によって深い浸食谷が形成されており、天然の要害となっている。

今回の調査地点は標高 320 m～321 m に位置している。

第2節 歴史的環境

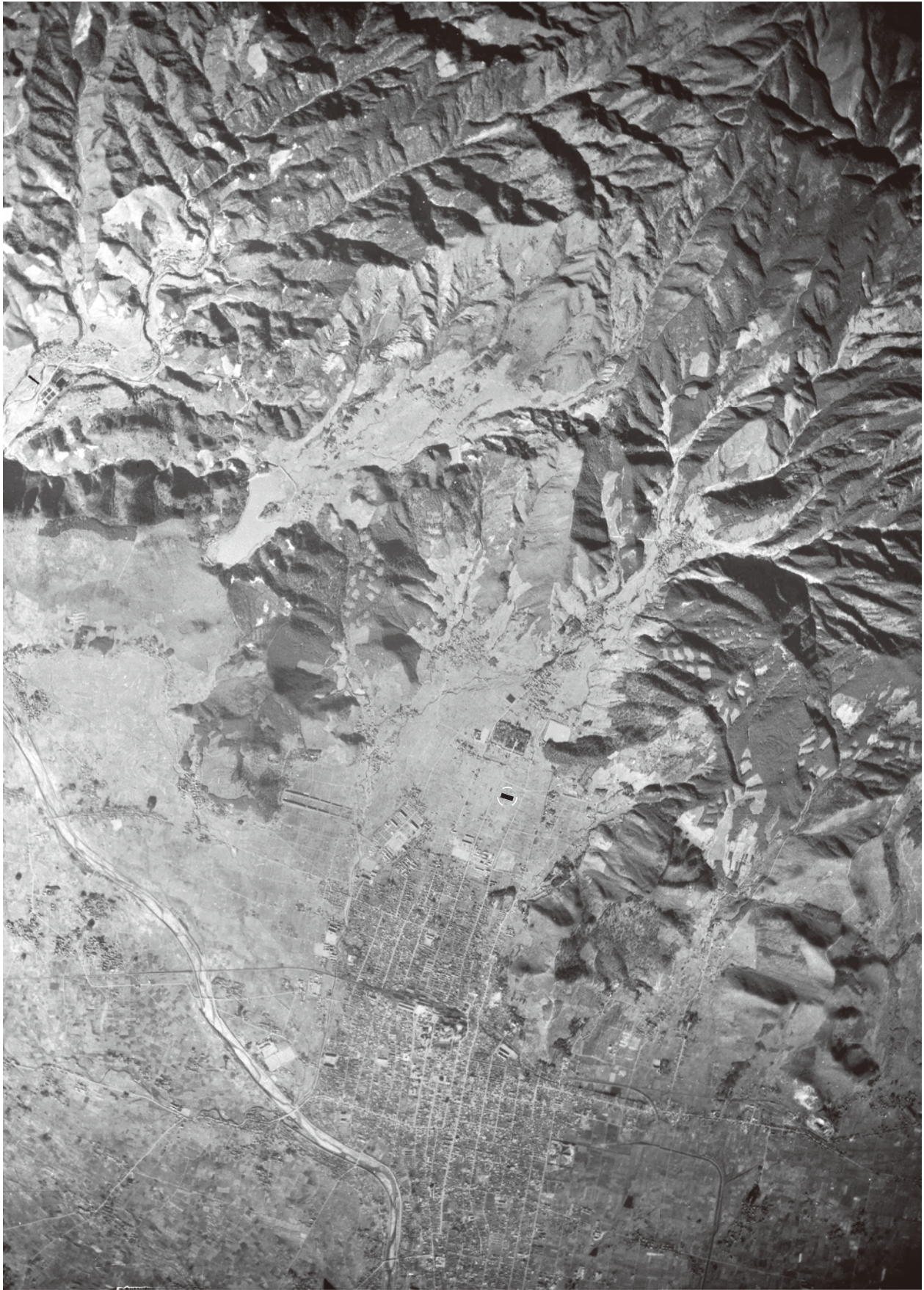
調査区は甲府市大手二丁目 4049 番 他に位置する（第 1・2 図）。昭和前期作製の地籍図（第 3 図）によると、調査地点付近は（岩窪町）「二ツ家」という字名で、西側には「鍛冶小路」という字名を確認することができる。

調査地点は武田氏館跡から南東に直線距離で約 600m の所に位置し、「古府之図」（『甲府略史』）に



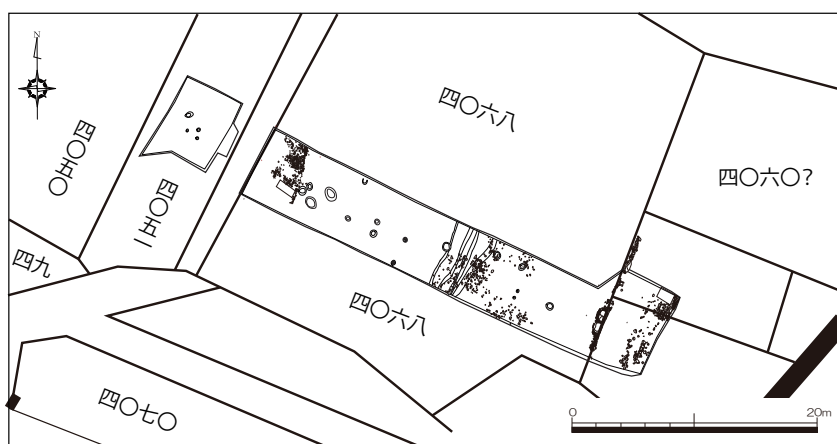
S=1/25000

第1図 遺跡位置図



■ 今回の調査地点（中央下）

第2図 調査区周辺の地形（「提供 国土地理院」1947年11月21日撮影空中写真に地点を加筆）



第3図 地籍図と調査区（トレースした地籍図に合成）

よると調査地点周辺には武田家臣の屋敷地（第4図）が記載されており、今回の調査地点は小島虎盛・小幡昌盛親子の屋敷伝承地に該当している。さらに、調査地点の西側には鍛冶小路が南北に走り、周辺の調査では熔融物が付着した土器や鉄滓が出土していることから、鍛冶工房があったと想定されている。

次に第5図で示した周辺の遺跡を紹介する。

縄文時代

15 緑が丘二丁目遺跡からは縄文時代から平安時代に至る遺物が出土している。平成6年の調査では、縄文時代中期中葉から後葉を中心とした土器や石材も出土している。同年第5次調査で縄文時代中期の曾利式土器が出土したことから、縄文時代の集落跡が展開したことも想定される。16 緑が丘一丁目遺跡は平成4年の試掘調査の結果、縄文中期初頭あるいは前葉のものと推測される底部片と黒曜石片1点が出土した。1・28 武田城下町遺跡・大手下遺跡からは、平成19年の調査で縄文時代のピット13基が検出された。ピット9からは大量の黒曜石の剥片が出土した。剥片の状況から粗割した黒曜石を持ち込み加工したことによって発生した破片を廃棄したと考えられる。ピット12は焼土が検出された。周辺の土が完全に変質していたことから長期間にわたり火を焚いたと思われる。焼土に伴い石皿として使用したと思われる石も出土している。甲府市街では縄文時代の遺構検出は非常に珍しい。18 宝町遺跡からは縄文時代前期後葉の諸磯a式土器が出土した。



第4図 古府之図（『甲府略史』に小路名称を記載）



第5図 周辺の遺跡分布図

弥生時代

甲府盆地の自然堤防、扇状地上に分布している。15 緑が丘二丁目遺跡からは平成6年6次調査で手捏土器が出土しており祭祀的要素が考えられる。7次調査では弥生時代後期末葉から古墳時代前期前葉を中心とした土器が出土した。弥生時代の土器は赤彩が塗布されている。その祖形は菊川式土器に求められ、4世紀後葉から5世紀前葉頃の時期が考えられる。17 塩部遺跡からは平成7年の調査において、弥生時代後期から古墳時代前期の方形周溝墓 11 基、弥生時代後期の住居址 1 棟が、平成 13～16 年の調査では弥生時代後期～古墳時代後期の住居址 45 軒、掘立柱建物跡 27 棟の他、古墳時代前期の方形周溝墓 4 基が検出された。

古墳時代

遺跡の分布は、盆地の北および東に位置する丘陵上に集中している。

9 永井遺跡からは平成9年の調査において古墳時代～平安時代の土器が出土している。17 塩部遺跡からは古墳時代前期の集落、方形周溝墓が検出された。この事から甲府盆地北部における一勢力圏を形成していたと思われる。

奈良・平安時代

甲府盆地北および東の丘陵縁辺部から南の扇状地（低位段丘）に到るまで分布している。17 塩部遺跡からは平成7年の調査において、奈良・平安時代の住居址 8 棟が検出された。

中世

15 緑が丘二丁目遺跡からは平成6年の第3次調査で人骨が検出された。人骨は屈葬で中世の土坑墓と想定される。遺跡の北に位置する法泉寺に係する墓地の一つの可能性がある。48 新紺屋小学校遺跡は三重の堀により囲まれた甲府城下町遺跡のうち二の堀と三の堀の間に立地する。また、この地は中世に展開した武田城下町の南端付近に立地すると考えられる。平成14年の調査の結果、柱穴 28 基、溝跡 14 条等が検出された。遺物は中世から近世にかけての土器や陶磁器である。

第3節 武田城下町

武田城下町は永正 16（1519）年に武田信虎が甲府市東部の川田館から相川扇状地頂部へ館を移したことから始まる。この館が戦国期の武田氏の本拠となった武田氏館である。半島状に突出した躑躅ヶ崎に接して造営されたことから躑躅ヶ崎館とも呼ばれた。この館を中心に南側の緩やかな扇状地に形成されたのが武田城下町である。

武田城下町の構造は、飯沼賢司「戦国期の都市”甲府”」（『甲府市史研究』2号）に復元が試みられている。

1. 南北には5本の主要道路（第4図）。西から①御厩小路—南小路—一条小路 ②御崎小路—工小路 ③広小路—柳小路 ④古籠屋小路—鍛冶小路—城屋小路 ⑤大泉寺小路
2. 小路で区画された屋敷地区には、特定の職人等の名を冠した鍛冶小路・工小路・連雀小路・番匠小路や、武士の職種を意味する近習小路、お小人町の地名が確認できる。職人や武士等の集住はある程度行われていたと考えられるが、一般的には武士と町人の混住が特徴的である。

と報告されている。

このような城下町形成の過程で、館周辺には有力家臣の屋敷が配されていた。その痕跡として現在でも地名が残されており、「逍軒屋敷」は武田信玄の弟信廉（逍遙軒信綱）、梅翁曲輪南部の「天久」は信廉の兄左馬助（＝典厩）信繁の屋敷跡を示すものと言われている。また、「古府之図」（第4図）には館の南側に穴山氏・高坂氏・馬場氏などの有力家臣の屋敷地が記されている。

武田勝頼は、天正3(1575)年長篠の戦いで織田・徳川の連合軍に敗れ、天正9(1581)年躑躅ヶ崎館

表1 周辺の遺跡名一覧

番号	遺跡名	時代	種別
1	武田城下町遺跡	近世	集落跡
2	武田氏館跡	中世	城館跡
3	疣石古墳	古墳時代	古墳
4	鐘推堂山遺跡	中世	城館跡
5	山路遺跡		散布地
6	西前田A遺跡	中・近世	散布地
7	西前田B遺跡		散布地
8	十二天遺跡	平安時代	散布地
9	永井遺跡	古墳・平安	散布地
10	三光寺山遺跡	古墳時代	古墳
11	村之内遺跡	古墳・平安	散布地
12	向田A遺跡	弥生～古墳	散布地
13	向田B遺跡		散布地
14	和田無名墳	古墳時代	古墳
15	緑ヶ丘二丁目遺跡	古墳～平安	古墳
16	緑ヶ丘一丁目遺跡	古墳時代	散布地
17	塩部遺跡	弥生～平安	包蔵地
18	宝町遺跡	縄文・平安	包蔵地
19	御馬屋小路A遺跡	中世	散布地
20	不動遺跡	近世～	散布地
21	日影遺跡		散布地
22	土屋敷遺跡	中世	城館跡
23	御馬屋小路B遺跡		散布地
24	お塚さん古墳	古墳時代	古墳
25	峰本南A遺跡	近世	寺院跡
26	峰本南B遺跡	近世	散布地
27	長閑遺跡	中世	包蔵地
28	大手下遺跡	縄文時代	散布地
29	山梨大学遺跡	奈良・平安	包蔵地
30	コツ塚古墳	古墳時代	古墳
31	八幡神社遺跡	縄文時代	散布地
32	躑躅ヶ崎亭跡	中世	城館跡
33	永慶寺跡	中世	寺院跡
34	岩窪C遺跡	古墳時代	散布地
35	中道東遺跡	近世	散布地
36	中道西遺跡	古墳時代	散布地
37	岩窪遺跡	奈良・平安・中世	包蔵地
38	二ッ塚2号墳	古墳時代	古墳
39	二ッ塚1号墳	古墳時代	古墳
40	二ッ塚3号墳	古墳時代	古墳
41	大笠山水の元遺跡	古墳時代～	散布地
42	亥ノ兎遺跡	平安時代～	散布地
43	大六天遺跡	平安時代～	散布地
44	御崎田遺跡	平安時代	散布地
45	一ノ森経塚遺跡群	中世	経塚
46	要害城跡	中世	城館跡
47	熊城跡	中世	城館跡
48	新紺屋小学校遺跡	近世	散布地
49	甲府城下町遺跡	近世	集落跡
50	甲府城跡	近世	城館跡

から新府城に入った。その際、館は破却された。天正 10(1582) 年織田軍が侵攻し勝頼は新府城を捨て岩殿城に向かったがついに自刃して果て甲斐武田氏は滅亡した。その後、天正 10～18 年まで徳川家康は躑躅ヶ崎館を修築し居館とした。

甲府城が完成し新たな城下町が形成され、古府中の南端は甲府城下町に取り込まれた。「元禄年間甲府絵図」(『甲府略史』)によると躑躅ヶ崎館の南側は農地として利用されている。

その後、柳沢時代に至り「…前後八幡、御納戸小路、元紺屋町、豎町、元三日町、塩部町、増山町、相川御崎町、醤油町、岩久保古城に至る迄、諸士の住宅豎小路、横小路、棟を並べて作り並べし有様は、…」 「…又古城の東躑躅ヶ崎の南面に龍華山永慶寺を創建し…」とある。また、市街は宝永二(1704)年の柳沢氏の法令により、「一 只今迄古府中と申事相止一同に府中と可申事 一 古城と申事相止御館跡と可申事 一 町々古と申事相止元何町と可申事」とし、上下府中の区画を廃止して古府中村を城下の域に加えて市街の規模を北方に拡張した(『甲府略史』)。

次に今回の調査地点付近の様子を絵図で確認してみると、「古府之図」(江戸時代)は小幡織部正(小島虎盛・小幡昌盛親子)の屋敷地(第 4 図)、「古府中村日影村絵図 貞享三年(1686)」においては駿河江尻城主山形三郎兵衛屋敷跡との記載が確認出来る。また、『甲斐国志』巻之四十五においては「…城屋町通りの東は眞田弾正・其東は甘利備前守 北は二ツ屋(=ニツ家?第 3 図参照) 横手南は横大門の間 今も甘利と呼へり南は山縣三郎兵衛又南は城の織部とあり…」との記述が確認できる。

なお、小幡(小島)親子と山縣の生存年は、小島虎盛(山城守、幼名 孫十郎)が文明 13(1491)～永禄 4(1561)年、小幡昌盛(又兵衛、豊後守、幼名 孫次郎)は天文 3(1534)～天正 10(1582)年、山形昌景(三郎兵衛)は享禄 2(1529)～天正 3(1575)年である。

いずれも後世に作成された資料であるために、個人の特定・断定は出来ないものの、調査地点は屋敷地であったことや、その後は農地としての土地利用に限られていたことは絵図・古文書等から見て取ることが出来る。

第 4 節 過去の武田城下町遺跡の調査(第 6 図、表 2～4)

過去に行われた調査及びその成果を図、表にまとめた。図中、黒色の囲み部分は遺構量、遺物量に関わりなく何らかの遺構・遺物が確認された地点を示す。グレーは確認調査の結果、遺構・遺物が確認されなかった地点を示している。

次に、武田城下町遺跡に関する報告書が刊行されている調査結果について紹介する。タイトル名の先頭のアルフベットは第 6 図中の位置を示す。

A 『武田城下町遺跡Ⅰ-大手一丁目(甲府市営林署跡地)発掘調査報告書-』

(中央都市建設株式会社・甲府市教育委員会 2001)

甲府市大手一丁目 4539-1 番地に位置する。調査の結果、住居跡が 1 基検出され平安時代の土師器、須恵器が出土している。土坑は 5 基検出され 6 号土坑から頭骨が埋葬されていた。中世の再葬墓と考えられる。その他の土坑からは近世の遺物が出土している。溝跡は 20 条検出された。出土遺物から中世以前、中世、近世の時期の遺構と思われる。集石土坑が 1 基検出された。古代の須恵器から 18 世紀代の近世陶磁器まで出土している。その他、ピット 104 基、暗渠 5 基、掘立柱建物跡が 1 棟検出された。

B 『武田城下町遺跡Ⅲ-国立大学法人山梨大学職員宿舍建設工事に伴う発掘調査報告書-』

(国立大学法人山梨大学・甲府市教育委員会 2009)

甲府市大手一丁目 4314 番地内に位置する。調査の結果、溝跡が 14 条、井戸跡が 3 基、土坑 10 基、柱穴 42 基(うち建物跡 1・柱穴列 1)が検出された。概ね 16 世紀中葉以降と思われる。遺物はかわらけ、

陶磁器、古銭、釘が出土している。

C 『武田城下町遺跡Ⅳ－セブン・イレブン・ジャパン店舗建設工事に伴う発掘調査報告書－』

(セブン・イレブン・ジャパン・甲府市教育委員会 2010)

甲府市大手一丁目 4549 番 1、4549 番 5 に位置する。調査の結果、中世と近世に属する溝跡 6 条（内暗渠 2 条）、井戸 4 基、柱穴 213 基（内掘立柱建物跡 1 棟、柱穴列 1 条）が検出された。遺物は、中世の遺物が 8 割以上を占めている。内訳は、国産製品として常滑焼甕、瀬戸美濃系陶器（播鉢・丸皿・天目茶碗）、かわらけ、土製播鉢、石製品（石臼、茶臼、ひで鉢、くぼみ石）、木製品（箸・杭・棒状木製品）、漆製椀、舶載品として青磁皿、白磁碗、染付皿、天目茶碗が出土している。

D 『武田城下町遺跡Ⅵ－国立大学法人山梨大学紫蓬館建設工事に伴う発掘調査報告書－』

(国立大学法人山梨大学・甲府市教育委員会 2010)

甲府市大手一丁目 4310 番地内に位置する。調査の結果、溝跡 9 条、土坑 9 基、ピット 13 基（内掘立柱建物跡 1）が検出された。遺物はかわらけ、土器播鉢、火鉢、陶磁器、石製品、釘、銅製品が出土している。

かわらけは 384 点出土した内 16 点に熔融した金属が付着していた。鍛冶に使用され廃棄されたものと考えられる。また、2・9号溝跡の上層部で多量に含まれていた焼土塊は、出土した熔融物付着土器や 2号溝跡から出土した銅塊の存在から、焼土塊は鍛冶に関連した炉などの壁在であったものが廃棄されたものではないかと結論付けされている。

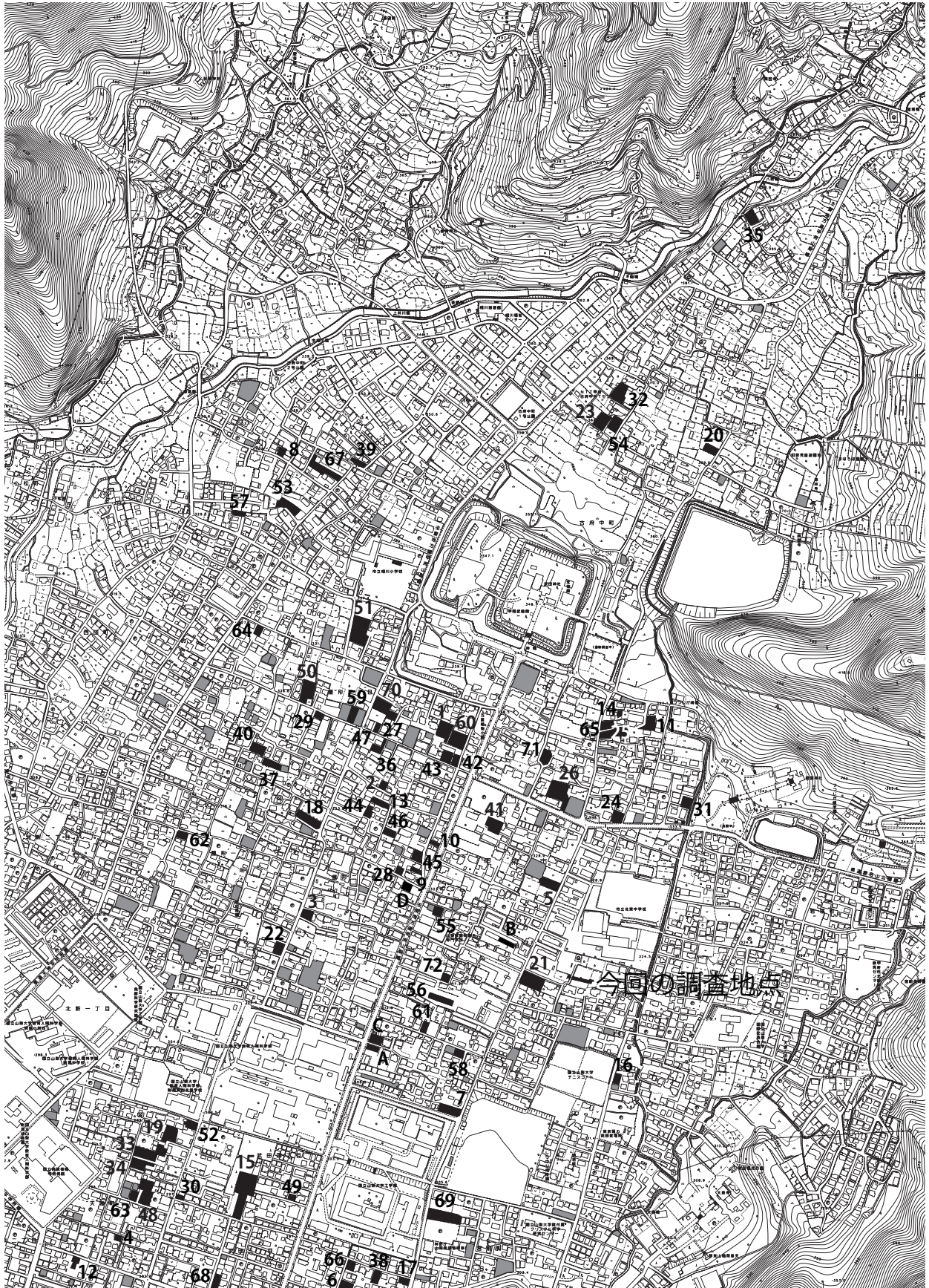
さらに、出土した熔融物付着土器、金属塊は X 線透過撮影、蛍光 X 線分析、X 線マイクロアナライザー付走査型電子顕微鏡によって分析が行われている。かわらけ付着の熔融物から、金・銅・鉛・スズが検出され、金製品の熔解を行った後に青銅製品等を熔解した土器片の可能性があると想定されている。金属塊に関しては、純度の高い銅である事は確認されたが用途は不明である。

時期は 16 世紀中葉から後半の中世城下町関連と、調査区一帯が農地化した際に構築された 17 世紀後半から 18 世紀前半の江戸期の遺構と思われる。

(第 6 図範囲外) 『武田城下町遺跡Ⅶ－日本銀行武田寮建設工事に伴う発掘調査報告書－』(日本銀行・甲府市教育委員会 2011.2)

今回作成した調査地点図より南に位置するため図には地点を掲載していない。

甲府市武田三丁目 239 番及び 257 番の一部に位置する。調査した結果、掘立柱建物跡 1 棟、溝跡 2 条、土坑 2 基、石組遺構 1 基及び小竪穴（ピット）が検出された。遺物は、掘立柱建物跡周辺から出土したかわらけには熔融物とともに金の付着が確認された。かわらけの他、甕、播鉢、釜、釘、石製品の火輪、地輪が出土している。



第6図 武田城下町遺跡の過去の調査（各報告書から作成、表2～4参照）

表2 武田城下町遺跡の調査成果(1)

図中 番号	報告書 掲載番号	場所	遺構	遺物	時代	備考	出典
1	11-36	甲府市屋形三丁目 2476	-	土器片	縄文~中世		『甲府市内遺ⅤⅢ H11 ~ H12』 甲府市 2008
2	11-37	甲府市屋形二丁目 2411-7 他	柱穴	-	中世か		『甲府市内遺ⅤⅢ H11 ~ H12』 甲府市 2008
3	11-40	甲府市屋形二丁目 2350-1 他	-	陶器片			『甲府市内遺ⅤⅢ H11 ~ H12』 甲府市 2008
4	11-41	甲府市天神町148-1 他	暗渠、ピット、溝状遺構	瓦、陶磁器、灰、かわらけ、白磁	陶磁器は近世~近代、中世		『甲府市内遺ⅤⅢ H11 ~ H12』 甲府市 2008
5	11-43	甲府市大手一丁目 4405	井戸跡、柱穴	かわらけ、天目茶碗	中世		『甲府市内遺ⅤⅢ H11 ~ H12』 甲府市 2008
6	11-44	甲府市武田三丁目 448 他	ピット	黒曜石、水晶片、研磨された石、かわらけ	中世		『甲府市内遺ⅤⅢ H11 ~ H12』 甲府市 2008
7	11-46	甲府市大手一丁目 4510-4 他	ピット、溝状遺構、石積	かわらけ、肥前系磁器	中世、18 ~ 19 世紀代		『甲府市内遺ⅤⅢ H11 ~ H12』 甲府市 2008
8	12-18	甲府市古府中町字中屋敷 973-6	ピット	天目茶碗、かわらけ	天目は瀬戸美濃系大窯第2期、16 世紀代		『甲府市内遺ⅤⅢ H11 ~ H12』 甲府市 2008
9	12-19	甲府市屋形二丁目 2392-3	溝状遺構、ピット	北茶碗・かわらけ(溝)	中世		『甲府市内遺ⅤⅢ H11 ~ H12』 甲府市 2008
10	12-23	甲府市屋形二丁目 4423-4	溝状遺構、土坑、ピット	-	中世		『甲府市内遺ⅤⅢ H11 ~ H12』 甲府市 2008
11	12-26	甲府市大手三丁目 3758-4 他	-	土器片、鉄滓			『甲府市内遺ⅤⅢ H11 ~ H12』 甲府市 2008
12	12-33	甲府市天神町7-4	溝状遺構、ピット、土坑	土器小片	溝は軸線が武田城下町とは異なる。16 世紀以前か。		『甲府市内遺ⅤⅢ H11 ~ H12』 甲府市 2008
13	12-34	甲府市屋形二丁目 2438-3	-	かわらけ、土製の播鉢	16 世紀代		『甲府市内遺ⅤⅢ H11 ~ H12』 甲府市 2008
14	12-36	甲府市大手三丁目 3764-3 他	-	土器片	縄文時代中期、平安時代、中世	土器廃棄遺構か	『甲府市内遺ⅤⅢ H11 ~ H12』 甲府市 2008
15	13-20	甲府市武田四丁目 28 他	土坑	土器片			『甲府市内遺ⅤⅢ H11 ~ H12』 甲府市 2008
16	13-22	甲府市古府中町 4882-13 他	ピット、溝状遺構	土器片	平安期		『甲府市内遺ⅤⅢ H11 ~ H12』 甲府市 2008
17	13-25	甲府市武田三丁目 413	土坑、溝状遺構	かわらけ、灰釉陶器	土坑は中世		『甲府市内遺ⅤⅢ H11 ~ H12』 甲府市 2008
18	13-26	甲府市屋形一丁目 1804-2	ピット、溝状遺構、石組を伴う暗渠	陶器、土師質土器			『甲府市内遺ⅤⅢ H11 ~ H12』 甲府市 2008
19	13-28	甲府市天神 329-1 他	柱穴、溝状遺構、土坑	かわらけ、陶磁器	2 ~ 4 号溝跡は近世以降、他は中世		『甲府市内遺ⅤⅢ H11 ~ H12』 甲府市 2008
20	13-30	甲府市古府中町 2845-2 他	柱穴、土坑	土器	中世		『甲府市内遺ⅤⅢ H11 ~ H12』 甲府市 2008
21	13-31	甲府市大手二丁目 4073-1 他	ピット、溝状遺構、井戸跡	かわらけ、陶磁器、鞆の羽口、鉄滓			『甲府市内遺ⅤⅢ H11 ~ H12』 甲府市 2008
22	13-35	甲府市屋形一丁目 2069-3	隅丸方形のブロンズ素掘りの井戸か	かわらけ	16 世紀代		『甲府市内遺ⅤⅢ H11 ~ H12』 甲府市 2008
23	13-36	甲府市古府中町 3147	ピット	土器細片			『甲府市内遺ⅤⅢ H11 ~ H12』 甲府市 2008
24	14-28	甲府市大手三丁目 3821-1	溝状遺構	土器片	中世		『甲府市内遺ⅤⅢ H11 ~ H12』 甲府市 2008
25	14-29	甲府市大手三丁目 3768-2 他	柱穴、土坑、石列、集石	縄文土器、須臾器、かわらけ	16 世紀中葉~後半	鍛冶小路周辺。かわらけに熔けた金属が 付着。	『甲府市内遺ⅤⅢ H11 ~ H12』 甲府市 2008

表3 武田城下町遺跡の調査成果(2)

図中 番号	報告書 掲載番号	場所	遺構	遺物	時代	備考	出典
26	14-30	甲府市大手三丁目3648-1他	柱穴、溝状遺構	古銭、鉄梁、鉄鉢片、かわらけ		馬場美濃守の屋敷跡とされる。	『甲府市内遺跡VI H13～H14』 甲府市 2009
27	14-31	甲府市屋形三丁目2498-4	—	灰釉陶器、土師質土器			『甲府市内遺跡VI H13～H14』 甲府市 2009
28	14-33	甲府市屋形二丁目2391-1他	石列、溝状遺構	かわらけ	16世紀代、石列は中世～近世		『甲府市内遺跡VI H13～H14』 甲府市 2009
29	14-44	甲府市屋形三丁目1719-1	—	かわらけ			『甲府市内遺跡VI H13～H14』 甲府市 2009
30	14-46	甲府市武田四丁目18-2	溝状遺構、柱穴	—	中世	道路削溝か。	『甲府市内遺跡VI H13～H14』 甲府市 2009
31	14-48	甲府市大手三丁目3876-6	礎石を伴う柱穴	溶融物が付着したかわらけ		鎌治小路に面する。	『甲府市内遺跡VI H13～H14』 甲府市 2009
32	14-56	甲府市古府中町3140他	溝状遺構(雨落ち溝)、石列	大塚段階の灰釉皿、かわらけ	遺構は江戸期、遺物は中世		『甲府市内遺跡VI H13～H14』 甲府市 2009
33	15-30	甲府市天神町337他	溝状遺構、暗渠、ピット	須恵器、土師器、青磁、土製鉢	平安期、15～16世紀		『甲府市内遺跡VII H15～H16』 甲府市 2010
34	15-31	甲府市天神町236他	溝状遺構、石列	土師器、土器	3号溝出土の土師器は古墳時代、中世		『甲府市内遺跡VII H15～H16』 甲府市 2010
35	15-32	甲府市下横翠寺町845	—	焙烙	江戸期		『甲府市内遺跡VII H15～H16』 甲府市 2010
36	15-34	甲府市屋形二丁目2447-1他	溝状遺構	土器甕鉢、天目茶碗	中世		『甲府市内遺跡VII H15～H16』 甲府市 2010
37	15-35	甲府市屋形三丁目1730-3他	溝状遺構、土坑	土製鉢、かわらけ、黒曜石剥片	16世紀代		『甲府市内遺跡VII H15～H16』 甲府市 2010
38	15-39	甲府市武田三丁目466	ピット	—			『甲府市内遺跡VII H15～H16』 甲府市 2010
39	15-42	甲府市古府中町1059-1他	—	土師器	中世		『甲府市内遺跡VII H15～H16』 甲府市 2010
40	15-44	甲府市屋形三丁目1738-1	—	土器片			『甲府市内遺跡VII H15～H16』 甲府市 2010
41	15-45	甲府市大手一丁目4441-2の一部	—	かわらけ	16世紀代		『甲府市内遺跡VII H15～H16』 甲府市 2010
42	15-48	甲府市屋形三丁目2467-5	柱穴	—			『甲府市内遺跡VII H15～H16』 甲府市 2010
43	16-31	甲府市屋形三丁目2467-4	—	かわらけ、天目茶碗	16世紀代		『甲府市内遺跡VII H15～H16』 甲府市 2010
44	16-32	甲府市屋形二丁目2413他	—	常滑焼片、かわらけ			『甲府市内遺跡VII H15～H16』 甲府市 2010
45	16-38	甲府市屋形二丁目2393-2	柱穴、堀跡	土器片			『甲府市内遺跡VII H15～H16』 甲府市 2010
46	16-40	甲府市屋形二丁目2395-5	井戸跡	土器片			『甲府市内遺跡VII H15～H16』 甲府市 2010
47	16-41	甲府市屋形三丁目2494-2他	ピット、井戸跡	かわらけ	16世紀中葉	溶融物、金粒の付着したかわらけ	『甲府市内遺跡VII H15～H16』 甲府市 2010
48	16-48	甲府市天神町233-1	溝状遺構、ピット	かわらけ、甕鉢			『甲府市内遺跡VII H15～H16』 甲府市 2010
49	17-39	甲府市武田四丁目235	溝状遺構	—	近世		『甲府市内遺跡VIII H17～H18』 甲府市 2011
50	17-46	甲府市屋形三丁目1592-3	—	陶器、土師器			『甲府市内遺跡VIII H17～H18』 甲府市 2011

表 4 武田城下町遺跡の調査成果 (3)

図中 番号	報告書 掲載番号	場所	遺構	遺物	時代	備考	出典
51	18-26	甲府市屋形三丁目 1645 他	井戸	かわらけ 他			『甲府市内遺跡Ⅷ H17～H18』 甲府市 2011
52	18-27	甲府市天神町 343	溝状遺構、溝に伴う石列、井戸	肥前系磁器 他	16, 17～18 世紀代		『甲府市内遺跡Ⅷ H17～H18』 甲府市 2011
53	18-31	甲府市古府中町 870-1 他	溝状遺構、石積み遺構	かわらけ			『甲府市内遺跡Ⅷ H17～H18』 甲府市 2011
54	18-32	甲府市古府中町 3145	—	かわらけ、肥前系磁器	中世、18 世紀前半		『甲府市内遺跡Ⅷ H17～H18』 甲府市 2011
55	18-33	甲府市大手一丁目 4382-5	—	かわらけ	16 世紀代		『甲府市内遺跡Ⅷ H17～H18』 甲府市 2011
56	18-37	甲府市大手一丁目 4302-8	—	土器片			『甲府市内遺跡Ⅷ H17～H18』 甲府市 2011
57	18-40	甲府市古府中町 855-5	石列	土器片			『甲府市内遺跡Ⅷ H17～H18』 甲府市 2011
58	18-43	甲府市大手一丁目 4579-1	—	土器片	戦国期		『甲府市内遺跡Ⅷ H17～H18』 甲府市 2011
59	18-51	甲府市屋形三丁目 1601-1	ピット	かわらけ			『甲府市内遺跡Ⅷ H17～H18』 甲府市 2011
60	19-20	甲府市屋形三丁目 2470-1	—	かわらけ、陶磁器	16 世紀代		『甲府市内遺Ⅸ H19～H20』 甲府市 2013
61	19-21	甲府市大手一丁目 4589-6 他	—	土器片	戦国期		『甲府市内遺Ⅸ H19～H20』 甲府市 2013
62	19-23	甲府市屋形一丁目 1996-3	溝状遺構 (堀か)、柱穴	かわらけ、漆付着の木片	中世		『甲府市内遺Ⅸ H19～H20』 甲府市 2013
63	19-32	甲府市天神町 241-5	—	土器片			『甲府市内遺Ⅸ H19～H20』 甲府市 2013
64	19-36	甲府市屋形三丁目 1570	—	土器片、寛永通宝			『甲府市内遺Ⅸ H19～H20』 甲府市 2013
65	19-37	甲府市大手三丁目 3767	ピット、溝状遺構	縄文土器、黒曜石剥片、石皿	縄文時代、中世	ピット 12 は縄文の竪穴住居の跡の可能性	『甲府市内遺Ⅸ H19～H20』 甲府市 2013
66	20-26	甲府市武田三丁目 461	溝状遺構	磁器、土器片			『甲府市内遺Ⅸ H19～H20』 甲府市 2013
67	20-27	甲府市古府中町 894-1 他	ピット、溝状遺構	かわらけ、青磁	16 世紀代		『甲府市内遺Ⅸ H19～H20』 甲府市 2013
68	20-31	甲府市武田三丁目 261	暗渠、溝状遺構、ピット	かわらけ	16 世紀代	溝は雨落ち溝か	『甲府市内遺Ⅸ H19～H20』 甲府市 2013
69	20-35	甲府市宮前町 244	—	磁器	江戸時代後半～明治		『甲府市内遺Ⅸ H19～H20』 甲府市 2013
70	20-47	甲府市屋形三丁目 2499-1 他	溝状遺構	かわらけ、灰釉磁器	瀬戸美濃大森段楯、16 世紀中葉		『甲府市内遺Ⅸ H19～H20』 甲府市 2013
71	21-16	甲府市大手三丁目 3687-1 他	石列、溝状遺構、暗渠、ピット	中国磁器、国産陶器、土器、古銭、石臼			『甲府市内遺十 H21～H22』 甲府市 2014
72	21-18	甲府市大手一丁目 4315-35	石積	—			『甲府市内遺十 H21～H22』 甲府市 2014

第3章 調査の方法

表土掘削は、試掘調査によって掘削済みのトレンチを拡張するような形で調査対象範囲の重機掘削を行った。表土掘削後、公民館に通じる道路の調査区部分にネットを、調査区の周囲にトラロープを設置し安全対策を行った。

調査区は、便宜上Ⅰ区、Ⅱ区、Ⅲ区に分けた（第7図）。

重機による表土掘削後、調査区は周囲からの水の流入および湧水により非常に水が溜まり易く、調査に支障をきたすため、調査区内に排水弁及び排水溝を人力により掘削した。

人力による遺物包含層掘削および遺構の検出作業を行ったが、予想以上に水の流入が多く度々水没し、現場作業に支障をきたす状況であった。

遺構の計測および土層断面・遺物出土状況図の写真測量は、CUBIC社製トータルステーションシステム電子平板「遺構くん」を使用した。「遺構くん」により作成した図面および補正した写真測量写真はadobe社製「illustratorCC15」により全体図、個別図、土層断面図を作成した。

出土した遺物は、表土、遺物包含層および遺構毎に取り上げた。遺構にかかわる遺物はトータルステーションシステムにより位置を計測し取り上げを行った。

使用システム

トータルステーション TOPCON SOKKIA CX-105

電子平板 Panasonic TOUGHBOOK CF-19

遺構実測支援ソフト CUBIC社「遺構くん」電子平板対応

第4章 調査の概要

第1節 検出状況（第7図）

前述のように、浸水が著しく非常に遺構の検出は困難であったが、石積み・石列遺構が1箇所、溝状遺構が1条、暗渠1条、土坑8基、ピット11基が検出された。

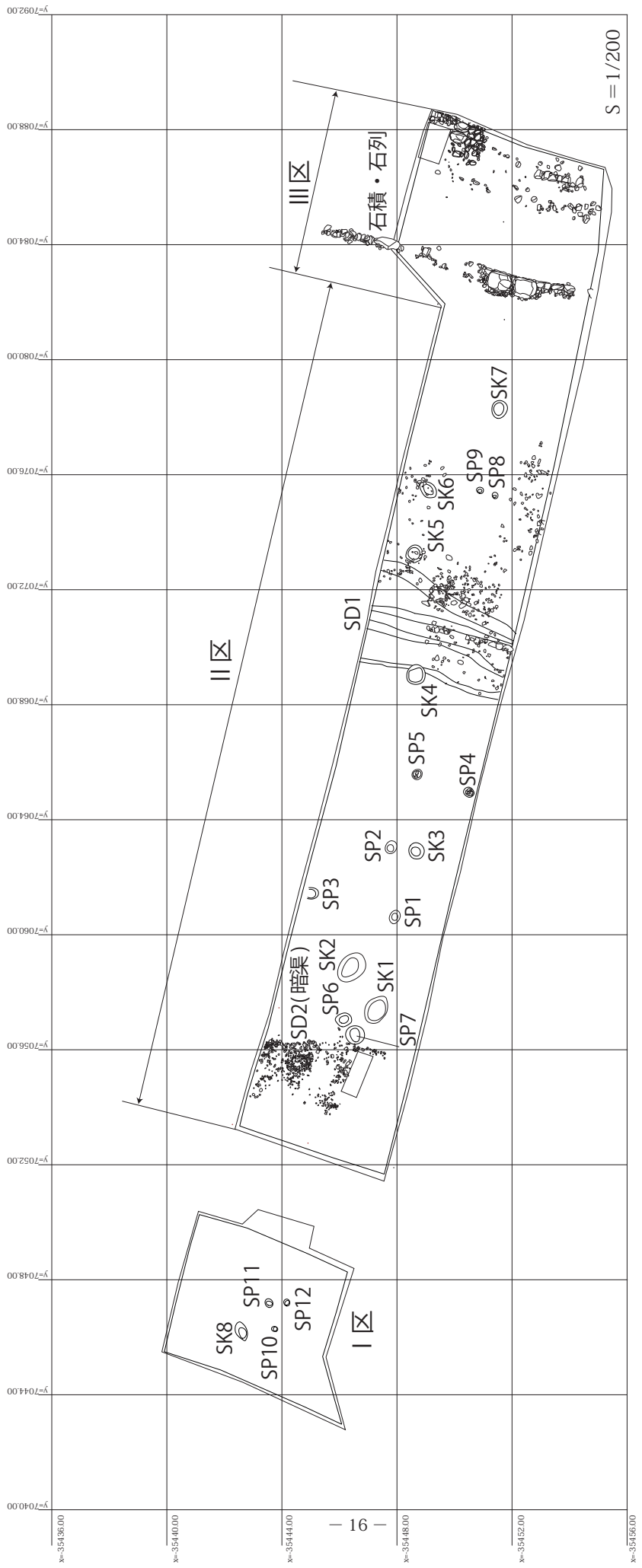
Ⅰ区の地山層は全面礫層で、その上に僅かに残る堆積土から土坑、ピットが検出された。礫層に関しては、大手三丁目で行われた武田氏館跡第14・15次調査でも検出された地山の礫と同じ性質のものと考えられる。Ⅱ、Ⅲ区では石積み・石列遺構、溝状遺構、土坑、ピットが検出された。また、溝状遺構上面から検出された礫群は氾濫による礫と考えられる。

第2節 土層断面（第8図）

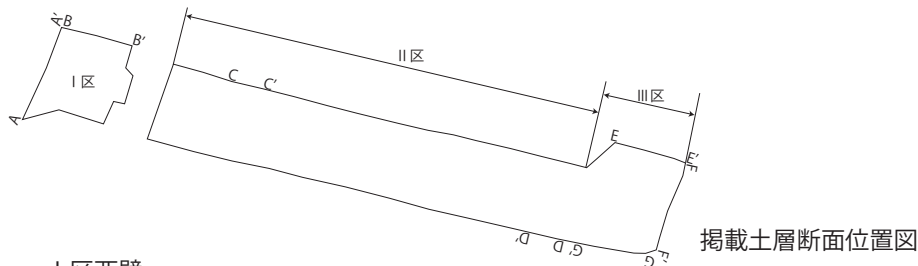
調査区は水田として利用されていたため、第1・2層はその影響を受けている。標高は320～321mを測る。基本層序を示す。

- 1 10YR3/3 暗褐色土 表土
- 2 10YR3/4 暗褐色土 床土 締まり強く、粘性やや強い。
- 3 10YR4/3 褐色土 シルト 締まり強く、粘性やや強い。マンガン斑2%、白色粒1%を含む。
- 4 10YR3/3 暗褐色土 シルト 締まり・粘性共に強い。赤色粒1%を含む。
- 5 (Ⅰ区) 10YR4/2 灰黄褐色土 地山礫層 (Ⅱ・Ⅲ区) 10YR3/2 黒褐色土 礫層

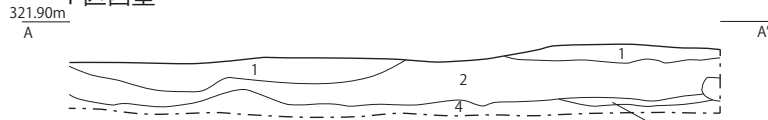
Ⅱ区の南壁西端では、第3層の下に粘土とマンガン斑の集積層が堆積している。遺物包含層は第3層、遺構検出面は第4層上面である。



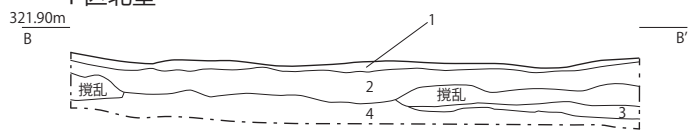
第7図 遺構分布図



I 区西壁

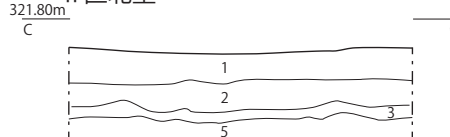


I 区北壁

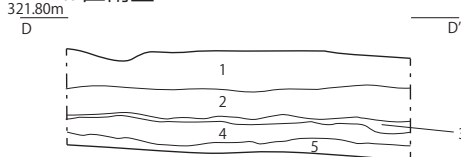


- 1.10YR3/3 暗褐色土 表土
- 2.10YR3/4 暗褐色土 床土 締まり強く、粘性やや強い。
- 3.10YR4/2 灰黄褐色土 締まり・粘性共にやや強い。マンガン3%含む。
- 4.10YR4/2 灰黄褐色土 地山 礫層

II 区北壁

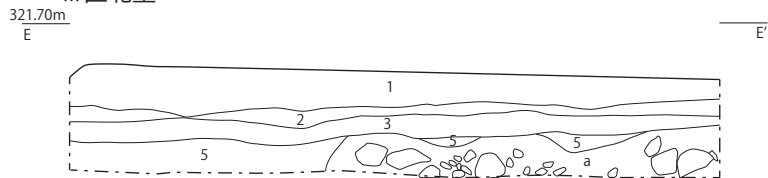


II 区南壁

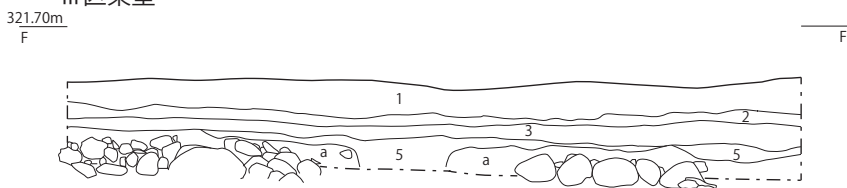


- 1.10YR3/3 暗褐色土 表土
- 2.10YR3/4 暗褐色土 床土 締まり強く、粘性やや強い。白色粒3%含む。
- 3.10YR3/4 暗褐色土 締まり強く、粘性やや強い。マンガン2%、白色粒1%含む。
- 4.10YR4/3 褐色土 10YR3/3暗褐色粘土を2%含む。締まり・粘性共に強い。マンガン3%。II区南壁西端付近に確認出来る。
- 5.10YR3/3 暗褐色土 締まり・粘性共に強い。赤色粒1%含む。

III 区北壁



III 区東壁



III 区南壁



- 1.10YR3/3 暗褐色土 表土
- 2.10YR3/4 暗褐色土 床土 締まり強く、粘性やや強い。白色粒3%含む。
- 3.10YR3/3 暗褐色土 シルト 締まり強く、粘性やや弱い。小礫径5mm大3%、赤色粒1%含む。
- 4.10YR4/1 褐灰色土 シルト質粘土 締まりやや弱く、粘性やや強い。鉄分1%含む。
- 5.10YR3/2 黒褐色土 締まり・粘性共に強い。赤色粒1%、小礫1%含む。
- ① 10YR3/1 黒褐色土 締まり・粘性共にやや強い。小礫径1cm大~1%、鉄分2%含む。
- ② 10YR4/1 褐灰色土 シルト 締まりやや弱く、粘性やや強い。鉄分1%含む。
- a.石垣構築層



第8図 調査区の土層断面

第5章 検出遺構

第1節 石積み・石列遺構（第9図）

検出された石積みは、南北に延びているが直線ではなくやや湾曲している。北側の調査区外に範囲を広げて調査し石積みが検出されたが、石の根が浮いている状況から原位置を留めていないと思われる。南側に関しては調査区壁面に石が検出されており延びている可能性はある。石積みの軸線は東に9°（調査区内）と東に17°（調査区外）と軸線を変え、石積みの東側に対面する石列の軸線は東に10°を示している。また、調査区北東角で検出された石列は東に25°を示している。

石積みは無加工の自然石を野面積みしており、構成している石の東側は平坦な面に揃えられている。石積みの構造は、胴木等は検出されず、土の上にやや小ぶりな礫（この石も東側を平坦な面に揃えてある）を配置し、その上に石を積んでいる。石積みの石の西面は無加工で裏込めの石が詰められている。検出された石積みの上段にさらに積み上げられていたのかは断定できない。

石積みの東側では2つの石列が検出された。石積みから東側に2.4mの位置で検出された石列はやや不規則で原位置から動いている可能性がある。さらに0.7m東側で検出された石列は、石積み方向の西側に平坦な面を作りだしている。2つの石列の方向がほぼ同じ軸線を示していることから2つの石列には関連性が認められる。この石列は、南北に走っているものの、中央部は石が途切れており空間となっている。また、石列と石積みとの間も、通路状の空間となっていることから、この空間部は、丁度T字路のような構造をなしている。

遺物は、かわらけ、白磁、青磁、天目茶碗、陶器類が出土している。かわらけには熔融物が付着していた。

第2節 溝状遺構（第10～13図、表6）

2条検出された。いずれも上部には自然堆積と思われる礫が検出され、その下から溝状遺構および暗渠の石列が検出されている。

①1号溝状遺構（SD1）（第10・11図）

Ⅱ区やや東寄りで検出され南北方向に延びている。当初上部は礫で覆われていたが、この時点で溝状遺構のプランは確認できており、溝状遺構が埋没した後に氾濫によって堆積した礫と思われる。礫除去後、溝状遺構を掘削した結果、溝の底中央付近に南北方向に石列が検出された。上部の礫とは明確に礫のサイズは異なっている。石列は平面が西に向かって立っている。検出された規模は南北5.2m、幅3.0～3.6m、深さは最大で0.3mである。主軸の方位は、N-14°-Eを指している。遺物は、須恵器、かわらけ、陶器、土製品や鉄滓・炉壁と思われる鍛冶工房に関わる破片が出土している。

②2号溝状遺構（暗渠）（SD2）（第12・13図）

Ⅱ区の西寄りで検出された。SD1と同様上部は礫で覆われていた。この礫もSD1上面と同じ性格の礫と思われる。上部の礫を除去した所、ほぼ南北方向に延びる暗渠が検出された。検出された規模は南北4.3m、幅0.3m、深さは最大で0.2mである。主軸の方位は、N-8°-E→N-3°-Wを指している。遺物は礫に混じって出土している。遺物は、須恵器、かわらけ、陶器が出土している。

第3節 土坑（第14図、表7）

I区は4層直上で1基、Ⅱ区は5層直上で7基が検出された。

1号～7号土坑はⅡ区で検出された。特に規則的な配列は認められず、深さは浅い。覆土には炭化物、焼土と思われる赤色粒が多く含まれる。

遺物はSK4の覆土中から陶質土器が1点出土した。規模は土坑計測表にまとめた。

第4節 ピット (第15図、表8)

I区は4層直上で3基、II区は5層直上で9基が検出された。そのうち、SP5、6は南北方向に並んでおり、いずれも覆土中に自然礫が含まれていた。この2基に配列性は想定できるが、他のピットに関しては特に配列性は認められない。規模はピット計測表にまとめた。

第6章 出土した遺物

土器は完形品が無くすべて破片である。以下遺構別に遺物の実測図を示す(第16～18図、表9・10)。
石積み周辺から出土した遺物

1から4はかわらけである。1は内面底部の黒色化した部分から鉛とスズ、銅が検出された。青銅製品の加工用に使用した可能性がある。2はⅢ区北西壁際の石列中から出土した。5は土師質土器、6は内耳土器の口縁部～体部である。外面は全体にススが付着している。口縁部上面の平坦面にススは付着していない。7は灰釉の鉢、8は灰釉の皿でいずれも瀬戸美濃産陶器大窯期(以下大窯期とする)第4段階の16世紀以降に属すると思われる。9は江戸期の緑釉の鉢もしくは香炉、10は江戸期の鉄釉の鉢か。

11～13は陶器の碗の高台部で、いずれも内面に鉄釉。11、12は江戸期の碗、13は天目茶碗である。14は土製品であるが器種は不明。15・16は近世以降の瓦である。

SD1から出土した遺物

17は須恵器の甕の体部で、外面はケズリ、ナデ調整、内面はケズリ。

18は土師器の坏の底部～体部である。外面は底部回転糸切り痕が残る。19は長石釉がある志野系の皿。20は炉壁の破片と思われる。外面の太い沈線は藁状のすさの痕跡か。内面は平坦で被熱している。断面には土中に混ぜた細い繊維状の混入物が焼けたために出来たと思われる孔も複数認められる。胎土は粒径の大きい長石、石英を含む。21は鉄滓である。

SD2から出土した遺物

22は須恵器の甕の体部で、外・内面共にケズリ、ナデ調整、胎土は長石を含む。23～25はかわらけの底部、26はかわらけの口縁部～体部である。23の底部は回転糸切り後外周をナデ調整、中心部は粗いナデ調整、内面はナデ調整。24は底部外周をケズリ、中心部側をナデ調整。25の底部は回転糸切り後外周をケズリ。26は口縁部～体部で内湾している。27は灰釉の碗である。大窯期第4段階の16世紀以降に属すると思われる。28は火鉢の口縁部～体部である。内面の口縁端部にススが付着している。

SK4から出土した遺物

29は土師質土器の口縁部～体部で、口縁部と体部に稜。口縁端部はケズリにより稜を作る。内面はナデ調整。

遺構外から出土した遺物

I区

30はかわらけの底部である。薄手で、外面底部は回転糸切り後外周をナデ調整、内面は摩耗している。中世と思われる。

II区

31青磁の碗の高台部、32はかわらけの口縁部～体部である。内湾している。33は土師質土器の鉢もしくは鍋の体部の突起部分、34～37は近世以降の瓦である。

確認調査出土遺物

トレンチ7 (I区)

38は白磁の碗の高台部、39は天目茶碗の体部である。

トレンチ3 (II区)

40は陶質土器の甕の口縁部～体部である。

トレンチ4 (II区)

41・42はかわらけで、41は口縁部～体部で直線的に伸びる。42は底部～体部で、内面はススが付着している。43はかわらけの口縁部～体部で、外・内面から鉛のみが検出され、スズ、銅は検出されなかった。鉛製品もしくは鉛を含む製品の加工に使用したと思われる。44は播鉢の体部、45は鉄釉の碗の口縁部～体部で戦国期に属すると思われる。46は灰釉の碗の底部で大窯期第4段階の16世紀末に属すると思われる。

トレンチ11 (III区)

47は土師器の坏蓋の口縁部の返りの部分である。

トレンチ5サブトレンチ

48は須恵器の坏蓋の天井部(摘みの根本)～体部である。ロクロ成形。胎土は細砂、石英、長石を含む。

49・50はかわらけの口縁部～体部である。49の底部は外周をナデ調整。厚手で内湾している。50は回転糸切り後、外周をナデ調整。51は土師質土器の口縁部である。52は角釘である。53は土師器の甕?の底部である。底部はナデ調整。

トレンチ2から出土した遺物

54は須恵器の甕の体部で、外・内面共にロクロ成形。55は土師器の底部である。底部はナデ調整。56は近世以降の瓦である。

遺構外から出土した炉壁

57は炉の壁の破片と思われる。平坦面は熱を受け変色し、一方の面は熱を受けていない。沈線はすき(藁状?)が混入されていた痕跡か。断面には土中に混ぜた細い繊維状の混入物が焼けたために出来たと思われる孔も複数認められる。58は形状から鞆羽口の破片と思われる。被熱部分と被熱していない部分に分かれ、被熱部分は通風孔の痕跡と思われる円の形状が残っている。断面には54同様混入物があったと思われる細かい孔が認められる。

第7章 まとめ

今回の調査で得られた大きな成果は石積み・石列の検出と鍛冶関連遺物の出土である。

①石積み・石列遺構

検出された状況は、石積みの軸線はN-9°-E°を示し、(調査区外ではN-17°-E°と軸線は変わっているが、この石積み部分は根本が浮いており原位置を留めていない可能性が考えられる)、石積みの東側に対面する石列の軸線はN-10°-E°を示している。武田城下町の軸線であるN-20°-E°とは一致しない。その他の遺構と比べてみると、SD1の底から検出された石列の軸線はN-14°-E°、SD2(暗渠)の軸線は、N-8°-E°→N-3°-E°を示している。石積み・石列とSD2(暗渠)の軸線はほぼ一致している。

次に石積み・石列の位置を地籍図(1/2400表記)に合わせてみたのが第3図である。地籍図は縮尺が確実ではないため、国土交通省による空撮、地形図、今回計測した調査区の位置データを参考にして、地籍図上に描かれている境界が石積みの位置であると想定し配置した。石積み・石列の軸線と地籍図の

軸線はほぼ一致している。

石積みは、大手石塁の石積みの特徴が報告されている（『史跡武田氏館跡XIV』第5章考察第3節）。

1. 小規模な石材や詰め石にハツリの痕跡は認められるが多くの自然石を無加工で野面積みしている。
2. 石材は川原石ではなく館周辺の山塊から産出する石材で多様な石材を用いている。
3. 石塁内部はほぼ栗石層で覆われている。
4. 根石と考えられる築石の下にひと回り小さな石材を並べて土台としている。

とし、築造年代は石積みの技術や虎口構造からも織豊期の遺構としている。

石積みの特徴から見ると今回検出された石積み・石列の特徴と共通しており、規模は確認出来ないが、石積みが武田氏館と同様の構造であることや検出された層位から考えれば、武田氏に仕える家臣の屋敷跡と想定することは可能だと思われる。この石積みから東に2.4～3.1m離れて2条の石列が検出されたが、この間は空間地となっている。精査したものの、硬化面は確認されなかったとともに、石積みや石列下に溝なども検出されなかった。従って、ここが通路であった確証は得られなかったが、石の配列と空間部の状況から道路があった可能性は考えておきたい。

その後の周辺の様子は、『甲斐国志』巻之四十五で当時の現況について「…岩窪村はその（註 古府中村）北に當れり是も城市の在し頃より村戸の建へき處とは見えす諸將士の邸宅條路の字な等今に其名を云傳へたる事は甚た稀れなれども畠に成りたる所を見れば壘壁を毀ち崩し石を聚積たる所其數實に限りなし…」と紹介されており、今回の調査で検出された石積みは、武田氏の時期の可能性が考えられる。

②鍛冶関連遺物

熔融物が付着した皿、炉壁や鞆羽口と思われる破片、鉄滓が出土した。

熔融物付着のかわらけと鉄滓は周辺の調査地点でも出土しており、鍛冶小路という名称が示すように鍛冶工房があったことが想定される。かわらけに付着した熔融物は藤澤明・三浦麻衣子（公益財団法人山梨文化財研究所）両氏に分析して頂いた結果、鉛・スズ・銅が検出され青銅製品の加工が行われたことが分かった。

炉壁と思われる破片にはすさが混入していた痕跡があり、また、鞆羽口は通風孔部分が僅かに残り、ある程度の口径が推定できる破片であった。

鉄滓は、周辺の調査では『武田城下町遺跡VI』で分析結果が報告されている。また、鉄滓の分析方法の一例として、鉄滓を表5（前頁）のように分類した後、専門の分析機関で詳細な分析を行っている例

表5 鉄滓類の分類表

製鉄炉			鍛冶炉		
鉄滓	鉄塊系遺物・ 炉内滓	鉄塊系遺物	鉄塊系遺物・ 炉内滓	鉄塊系遺物	鉄塊系遺物
		炉内滓（含鉄大）		炉内滓（含鉄大）	炉内滓（含鉄大）
		炉内滓（含鉄小）		炉内滓（含鉄小）	炉内滓（含鉄小）
		炉内滓（磁着あり・錆付着のみ）		炉内滓（磁着あり・錆付着のみ）	炉内滓（磁着あり・錆付着のみ）
		炉内滓（磁着なし）		炉内滓（磁着なし）	炉内滓（磁着なし）
	炉底滓	炉底滓 A 類	鍛冶滓		
		炉底滓 B 類	椀形滓		
	流出滓	流出滓（緻密）	流出滓	流出滓（緻密）	流出滓（緻密）
		流出滓（ガス質）		流出滓（ガス質）	流出滓（ガス質）
		流出孔滓			
その他の滓	炉内流出滓	炉壁 A 類			
	砂鉄焼結滓	炉壁 B 類			
	再結合滓				
	工具付着滓				
	鍛冶滓				
炉壁	炉壁（鉄滓融着あり）				
	炉壁（鉄滓融着なし）				

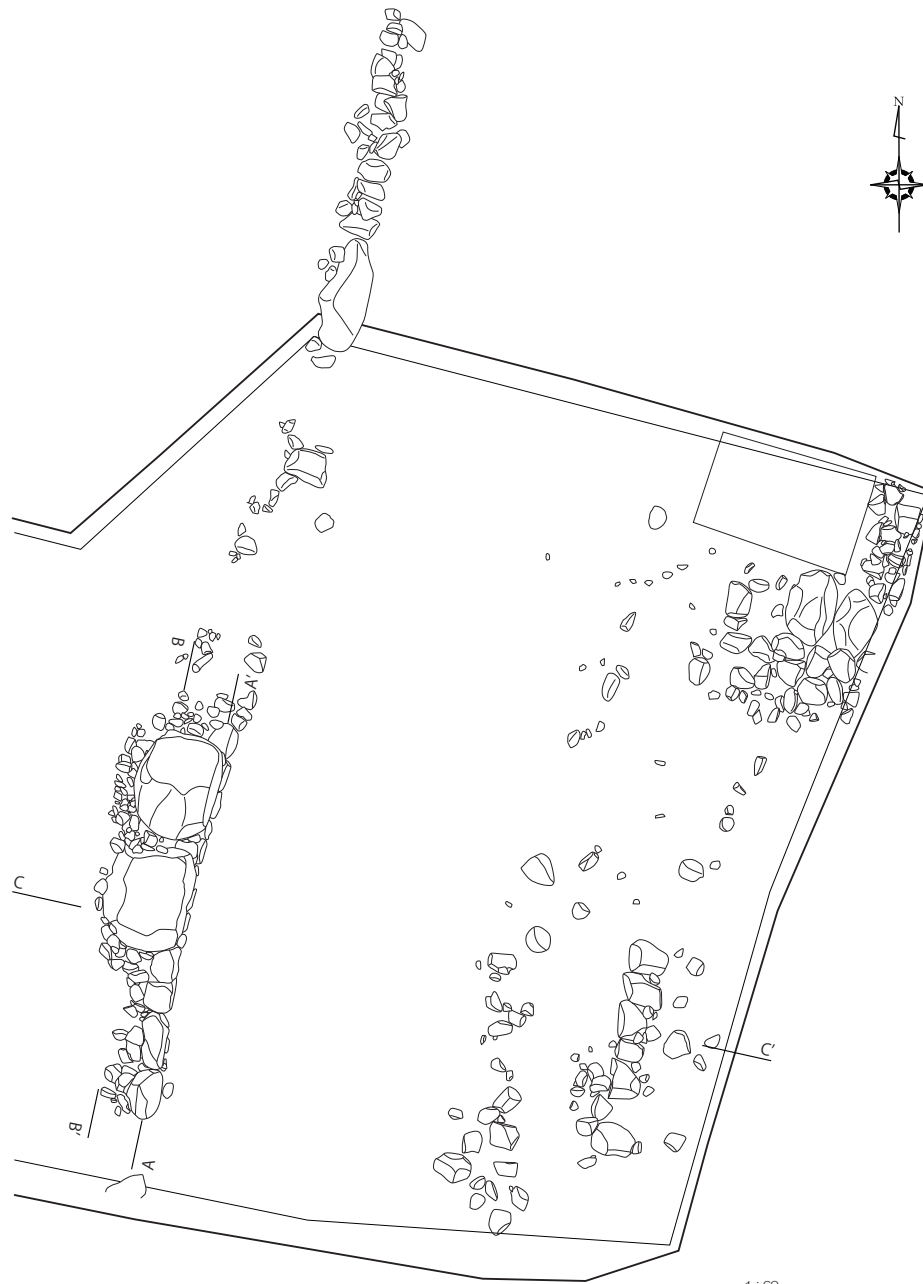
高尾浩司・小口英一郎編 2005『中道東山西山遺跡』（財団法人鳥取県教育文化財団）
 2014『松山館跡発掘調査報告書』（岩手県沿岸広域振興局土木部宮古土木センター・（公財）岩手県文化進行事業団）
 2005.3『前田遺跡（2）下布施氏館跡 原田遺跡I区（分析編）』（国土交通省中国地方整備局・鳥根県教育委員会）

もある。これにより、鉄滓がどの製造工程（製錬、精錬、鍛練、鍛冶）によって発生した鉄滓かによってその工房の性格が明らかにされることになる。今後は積極的に分類・分析を行い、出土した鉄滓の分析結果を蓄積して行く必要があると思われる。

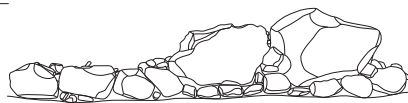
今回の調査は、現在まで調査が行われなかった区域であり、その空白域から石積み・石列や鍛冶関連遺物が検出された事は、武田城下町における土地利用の全貌を明らかにする上で非常に貴重な情報をもたらしたと言える。

引用・参考文献

- 飯沼賢司 1985「戦国期の都市”甲府”」（『甲府市史研究』2号）
- 甲府市役所 1918『甲府略史』
- 甲斐志料刊行会 編 1935『甲斐志料集成4～6 甲斐国志上・中・下』
- 甲斐志料刊行会 編 1935『甲斐志料集成7 妙法寺記、甲陽日記（高白齋記）』
- 山梨県教育委員会編 1982『山梨県の民家』
- 甲府市教育委員会 1986『史跡 武田氏館跡Ⅱ』（甲府市文化財調査報告5）
- 甲府市教育委員会 2000『史跡 武田氏館跡Ⅶ』（甲府市文化財調査報告11）
- 甲府市教育委員会 2009『史跡 武田氏館跡ⅩⅣ』（甲府市文化財調査報告42）
- 中央都市建設株式会社 甲府市教育委員会 2001『武田城下町遺跡Ⅰ』（甲府市文化財調査報告17）
- 国立大学法人山梨大学 甲府市教育委員会 2009『武田城下町遺跡Ⅲ』（甲府市文化財調査報告43）
- セブン-イレブン・ジャパン 甲府市教育委員会 2010『武田城下町遺跡Ⅳ』（甲府市文化財調査報告45）
- 国立大学法人山梨大学・甲府市教育委員会 2010『武田城下町遺跡Ⅵ』（甲府市文化財調査報告48）
- 日本銀行・甲府市教育委員会 52011.2『武田城下町遺跡Ⅶ』（甲府市文化財調査報告54）
- 甲府市教育委員会 2004『甲府市内遺跡Ⅰ－昭和61年度～平成5年度試掘調査報告書－』（甲府市文化財調査報告26）
- 甲府市教育委員会 2005『甲府市内遺跡Ⅱ－平成6年度試掘調査報告書－』（甲府市文化財調査報告29）
- 甲府市教育委員会 2006『甲府市内遺跡Ⅲ－平成7・8年度試掘調査報告書－』（甲府市文化財調査報告31）
- 甲府市教育委員会 2007『甲府市内遺跡Ⅳ－平成9～10年度試掘調査報告書－』（甲府市文化財調査報告35）
- 甲府市教育委員会 2008『甲府市内遺跡Ⅴ－平成11～12年度試掘調査報告書－』（甲府市文化財調査報告38）
- 甲府市教育委員会 2009『甲府市内遺跡Ⅵ－平成13～14年度試掘調査報告書－』（甲府市文化財調査報告41）
- 甲府市教育委員会 2010『甲府市内遺跡Ⅶ－平成15～16年度市内遺跡試掘調査報告書－』（甲府市文化財調査報告49）
- 甲府市教育委員会 2011『甲府市内遺跡Ⅷ－平成17～18年度試掘調査報告書－』（甲府市文化財調査報告59）
- 甲府市教育委員会 2013『甲府市内遺跡Ⅸ－平成19～20年度試掘確認調査報告書－』（甲府市文化財調査報告63）
- 甲府市教育委員会 2014『甲府市内遺跡Ⅹ－平成21・22年度試掘確認調査報告書－』（甲府市文化財調査報告68）
- 高尾浩司・小口英一郎編（財団法人鳥取県教育文化財団）2005『中道東山西山遺跡』
- 岩手県沿岸広域振興局土木部宮古土木センター・（公財）岩手県文化進行事業団 2014『松山館跡発掘調査報告書』
- 国土交通省中国地方整備局・島根県教育委員会 2005.3『前田遺跡（2）下布施氏館跡 原田遺跡Ⅰ区（分析編）』



321.80m
A



A'

0 1:60 2m

321.80m
B



B'

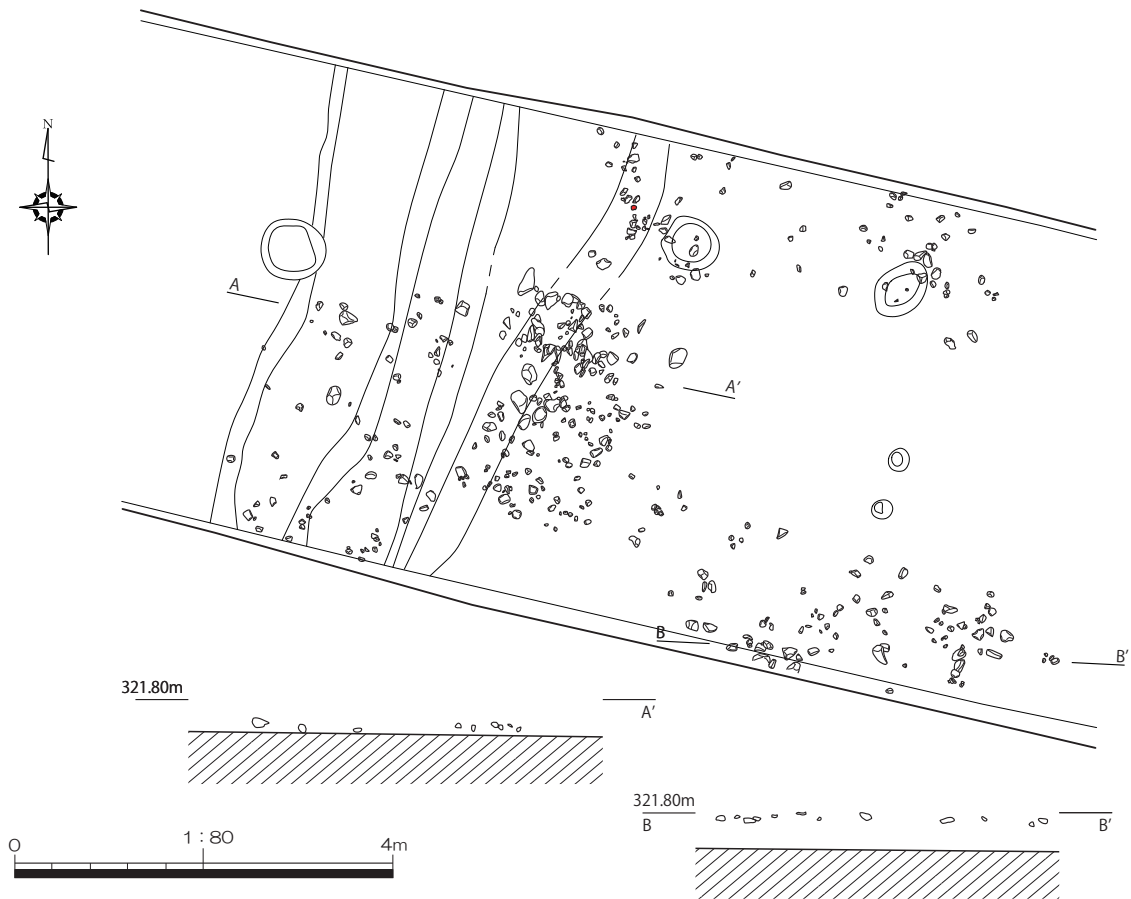
321.80m
C



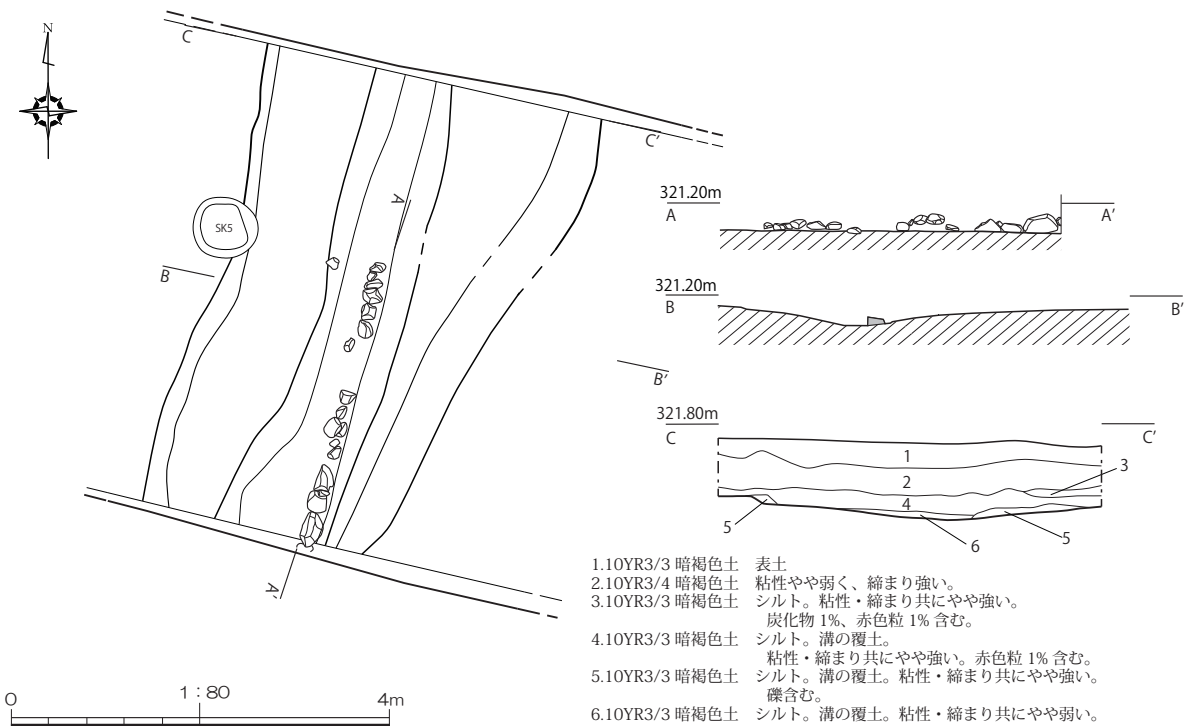
C'

1. 10YR3/3 暗褐色土 シルト 粘性やや弱く縮まりやや強い。
白色粒 2%、小礫径 5mm ~ 2%、赤色粒 1% 含む。
2. 10YR3/2 黒褐色土 礫層 粘性やや弱く、縮まりやや強い。

第9図 石積み・石列



第10図 1号溝状遺構 (SD1) 上面の礫検出状況

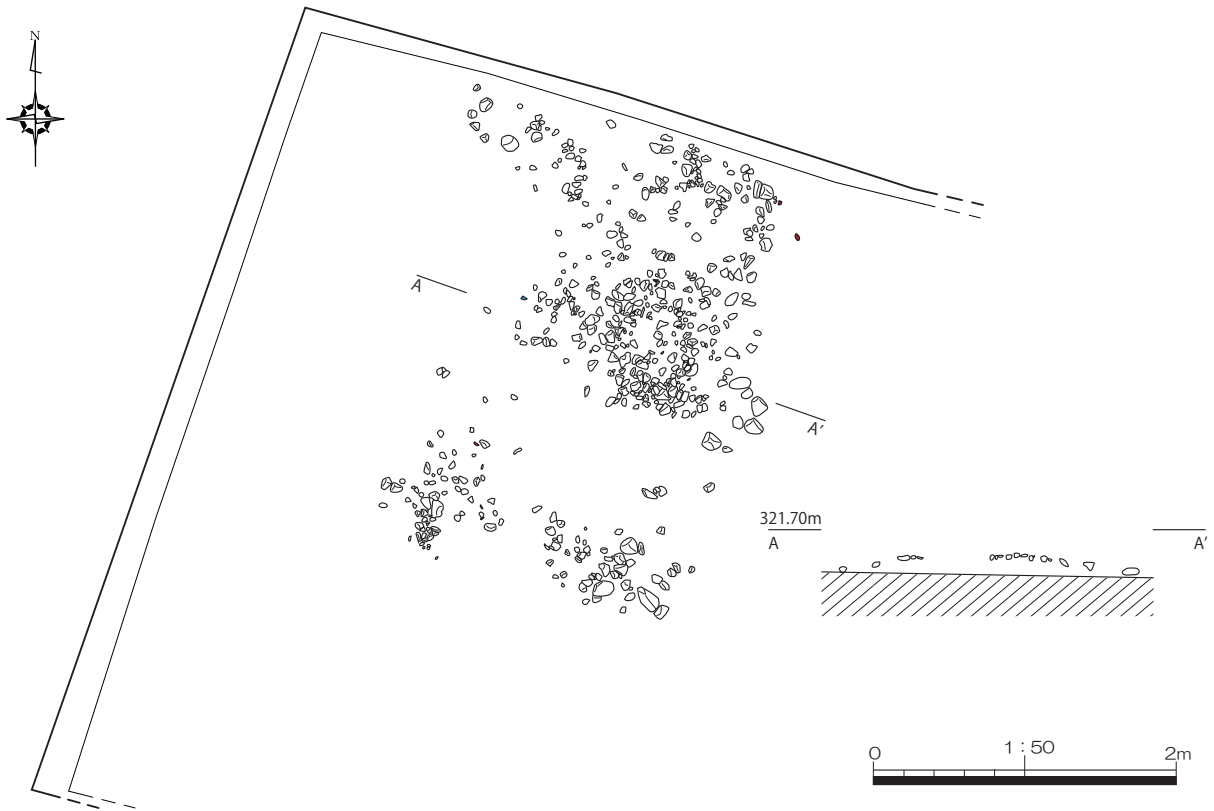


- 1.10YR3/3 暗褐色土 表土
- 2.10YR3/4 暗褐色土 粘性やや弱く、縮まり強い。
- 3.10YR3/3 暗褐色土 シルト。粘性・縮まり共にやや強い。
炭化物1%、赤色粒1%含む。
- 4.10YR3/3 暗褐色土 シルト。溝の覆土。
- 5.10YR3/3 暗褐色土 粘性・縮まり共にやや強い。赤色粒1%含む。
シルト。溝の覆土。粘性・縮まり共にやや強い。
礫含む。
- 6.10YR3/3 暗褐色土 シルト。溝の覆土。粘性・縮まり共にやや弱い。

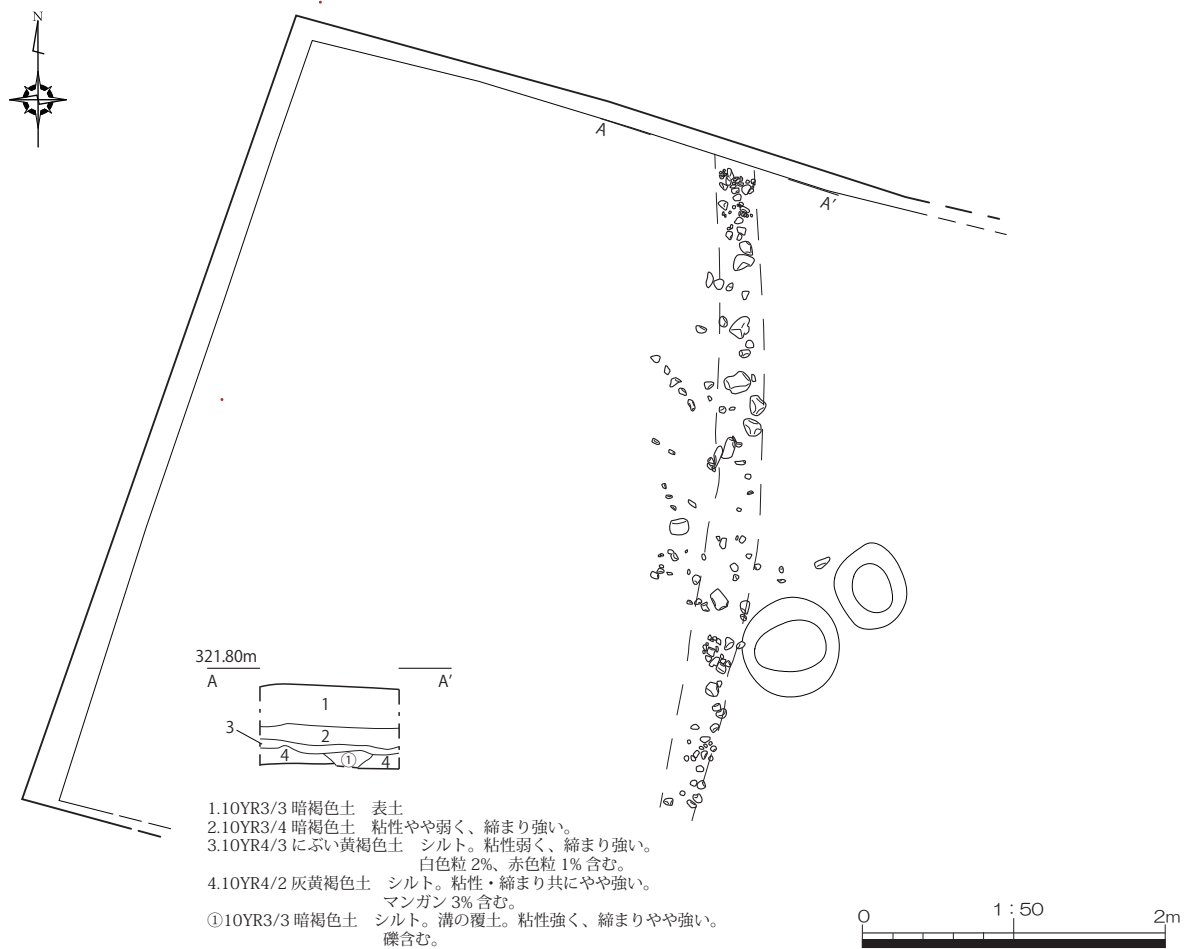
第11図 1号溝状遺構 (SD1)

表6 溝状遺構計測表

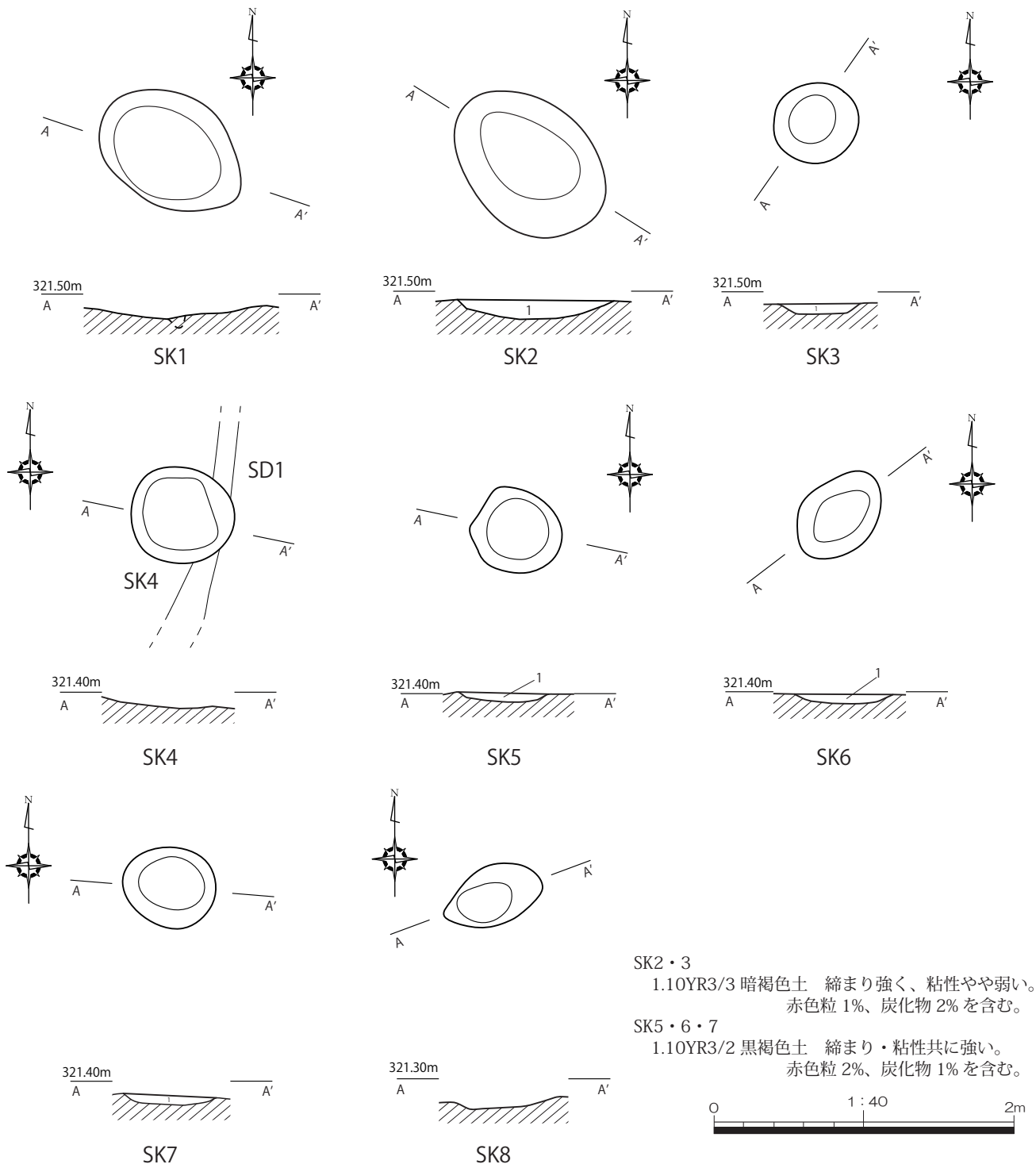
遺構名	規模 m ※ (現存値)			主軸方向	備考
	長さ	幅	深さ		
1号溝状遺構 (SD1)	(5.2)	3.0 ~ 3.6	0.3	N-14° -E	
2号溝状遺構 (SD2)	(4.3)	(0.3)	(0.2)	N-8° -E → N-3° -W	



第 12 図 2号溝状遺構 (SD2) 上面の礫検出状況

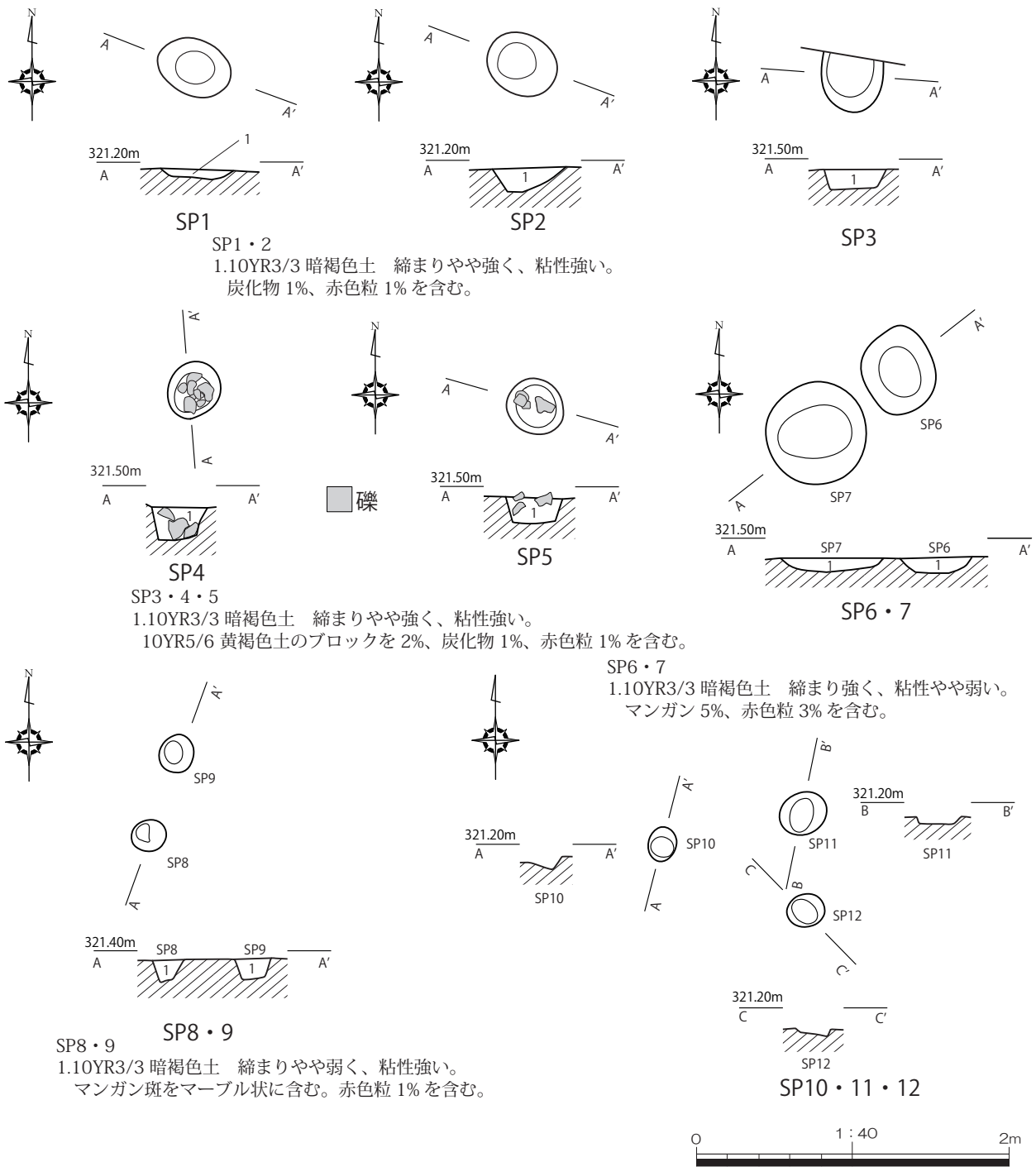


第 13 図 2号溝状遺構 (SD2 = 暗渠)



第 14 図 土坑
表 7 土坑計測表

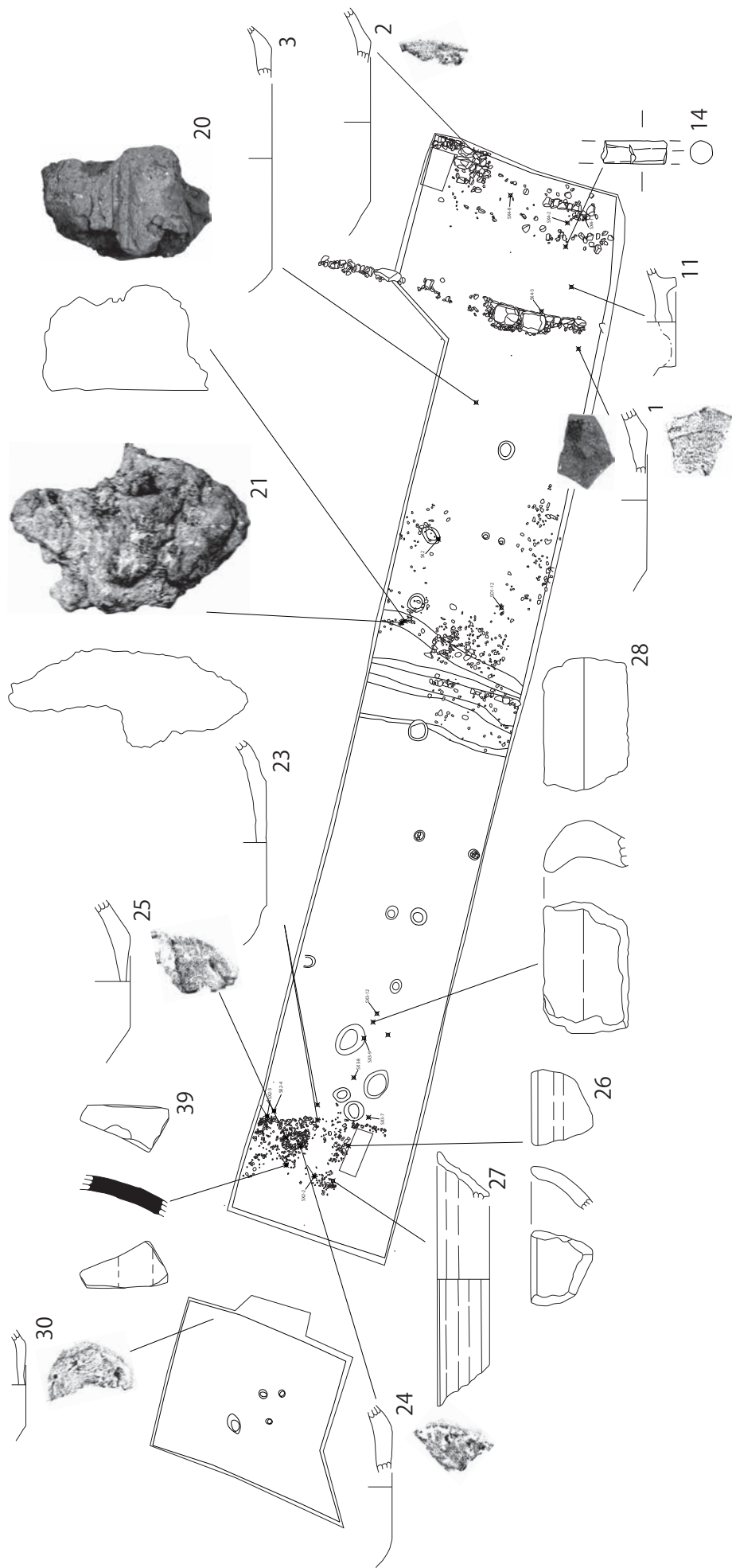
遺構名	平面形	規模 cm ※ (現存値)			備考
		長軸	短軸	深さ	
SK1	長楕円	102	74	9	
SK2	長楕円	114	74	12	
SK3	円形	54	53	6	
SK4	不整形	68	66	4	陶質土器片
SK5	不整形	66	62	6	
SK6	長楕円	67	48	6	
SK7	楕円	62	55	7	
SK8	不整形	68	38	6	



第 15 図 ピット

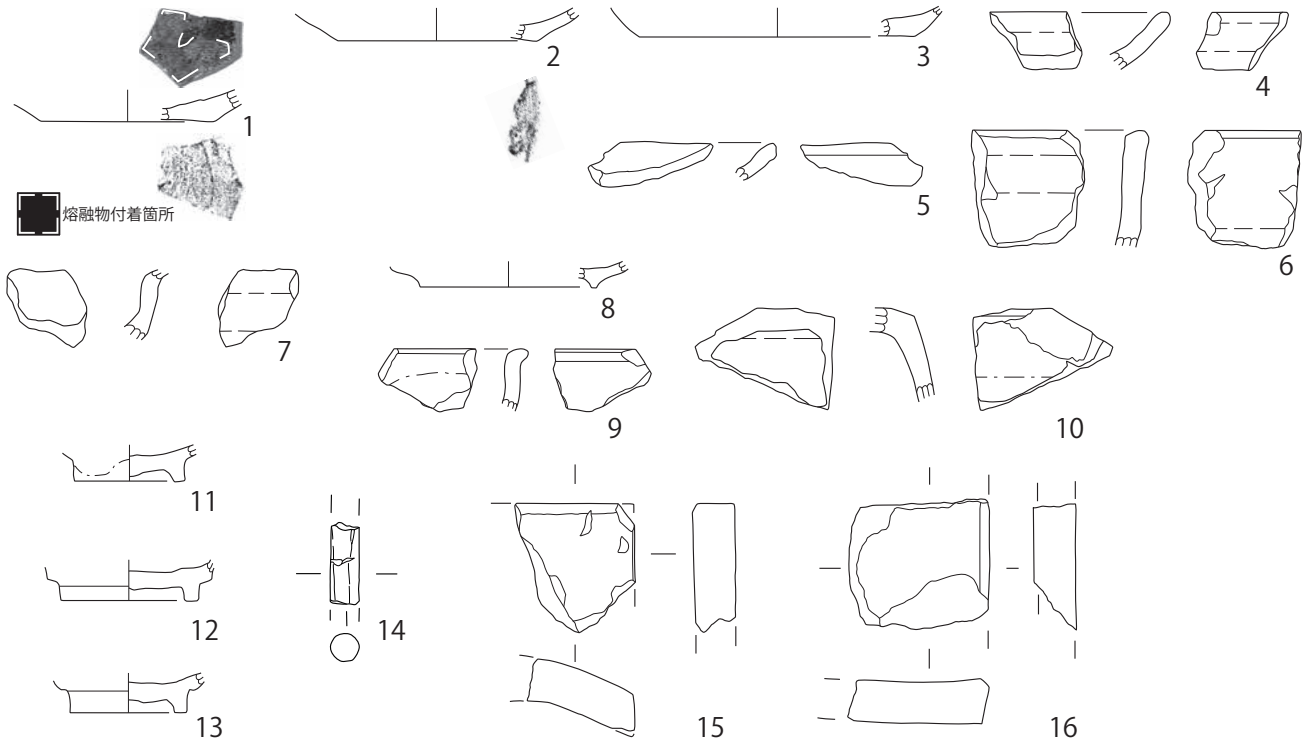
表 8 ピット計測表

遺構名	平面形	規模 cm ※ (現存値)			備考
		長軸	短軸	深さ	
SP1	長楕円形	48	35	6	
SP2	楕円形	46	37	14	
SP3	—	(35)	40	13	
SP4	楕円形	38	33	21	覆土中に磔
SP5	楕円形	37	34	26	覆土中に磔
SP6	楕円形	63	63	9	
SP7	不整形	51	46	9	
SP8	楕円形	24	20	14	
SP9	楕円形	22	21	13	
SP10	楕円形	22	18	7	
SP11	楕円形	31	28	5	
SP12	楕円形	25	22	6	

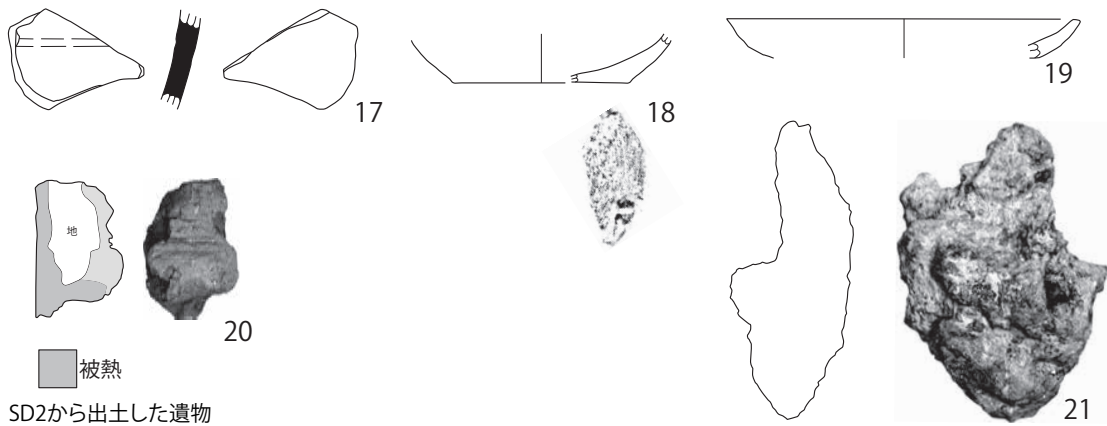


第16图 遺物出土地点图

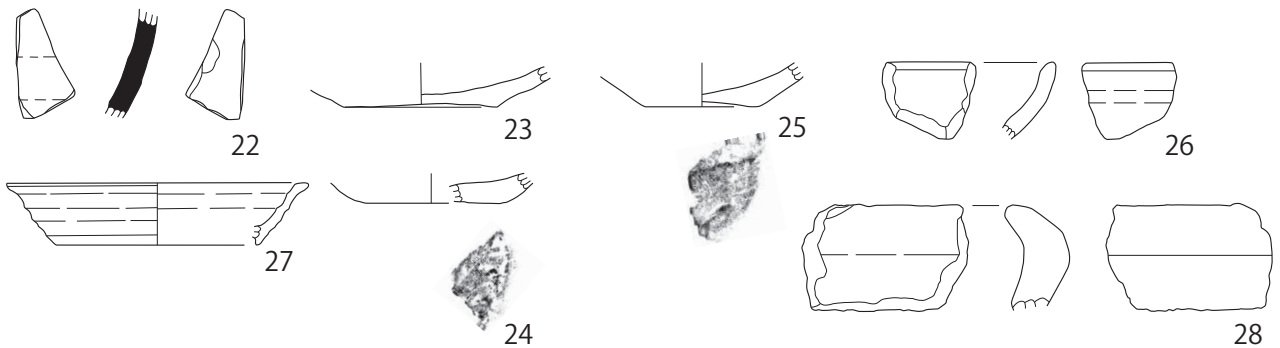
石積み周辺から出土した遺物



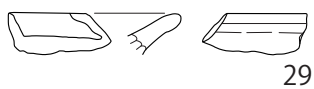
SD1から出土した遺物



SD2から出土した遺物



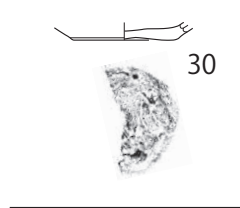
SK4から出土した遺物



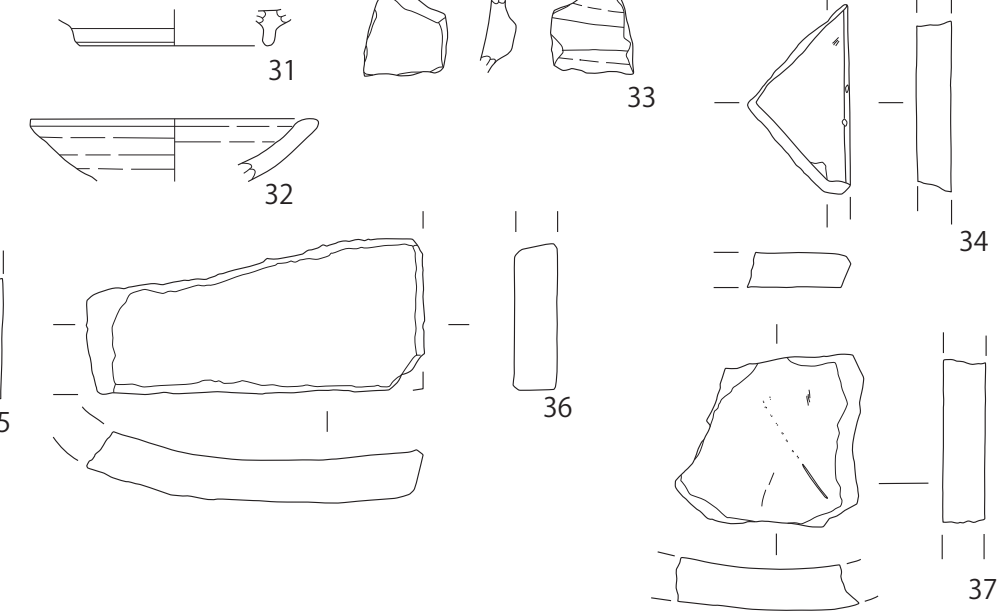
第 17 図 遺物実測図 (1)

遺構外出土遺物

I区から出土した遺物

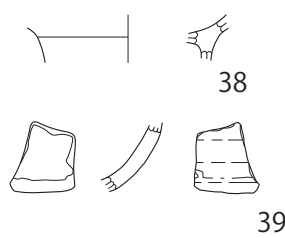


II区から出土した遺物



確認調査出土遺物

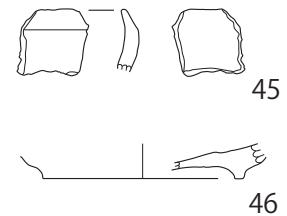
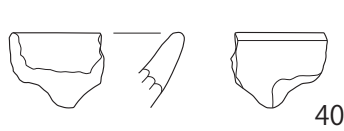
トレンチ7 (I区) から出土した遺物



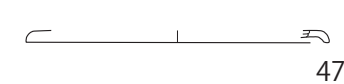
トレンチ4 (II区) から出土した遺物



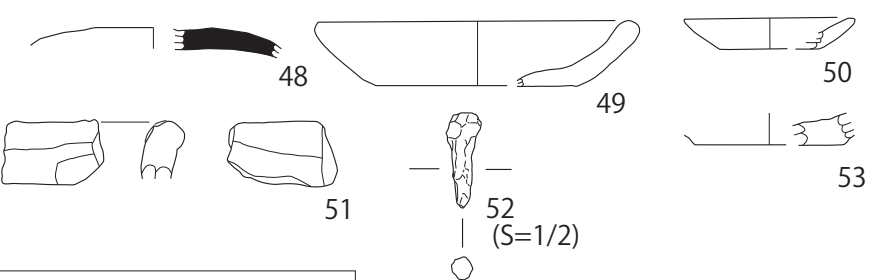
トレンチ3 (II区) から出土した遺物



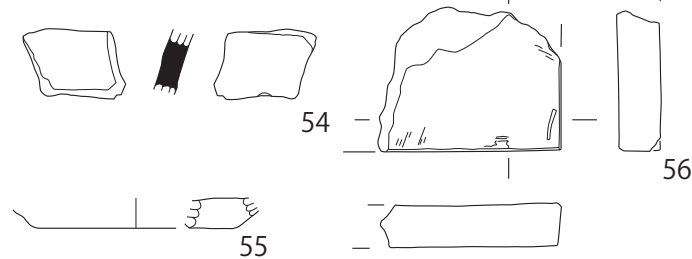
トレンチ11 (III区) から出土した遺物



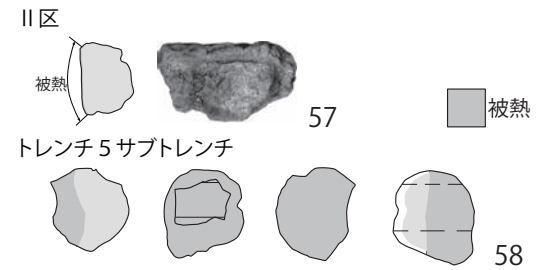
トレンチ5 サブトレンチから出土した遺物



トレンチ2から出土した遺物



遺構外から出土した炉の壁の破片



第18図 遺物実測図(2)

表9 遺物観測表(1)

挿図 番号	出土地点 位置	種別	器種	法量(cm),()は復元 値、< >は現存値			部位		器形・調整の特徴			色調		胎土	焼成	備考
				口径	器高	底径	外周	内面	外面	内面	外面	内面				
1	右種岡辺	かわらけ	皿	—	(7.0)	—	底部～体部	底部ナデ、体部横位のハケメ	底面ナデ	底面ナデ	底面ナデ	底面ナデ	底面ナデ	底面ナデ	良好	鉛、スズ、銅が付着しており青銅製品の加工に使用か。
2	右種岡辺	土器	かわらけ	—	(8.0)	—	底部～体部	底面外周ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	良好	中世
3	右種岡辺	土器	かわらけ	—	(11.0)	—	底部	底部回転糸切り痕	体部下ナデ	体部下ナデ	体部下ナデ	体部下ナデ	体部下ナデ	体部下ナデ	良好	中世
4	右種岡辺	土器	かわらけ	—	<2.3>	—	口縁部～体部	口縁部	体部下ナデ	体部下ナデ	体部下ナデ	体部下ナデ	体部下ナデ	体部下ナデ	良好	中世
5	右種岡辺	土師質土器	裏	—	<1.5>	—	口縁部	口縁部	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	良好	中世
6	右種岡辺	土師質土器	内耳	—	<4.7>	—	口縁部～体部	口縁部	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	良好	中世
7	右種岡辺	陶器	鉢	—	<3.1>	—	体部	体部	灰釉	灰釉	灰釉	灰釉	灰釉	灰釉	良好	大鷲期16～17世紀
8	右種岡辺	陶器	皿	—	(7.0)	—	底部～体部	底面	灰釉	灰釉	灰釉	灰釉	灰釉	灰釉	良好	大鷲期16～17世紀
9	右種岡辺	陶器	鉢もしくは香炉	—	<2.5>	—	口縁部～体部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	良好	中世
10	右種岡辺	陶器	鉢	—	<4.1>	—	体部	体部	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	良好	江戸
11	右種岡辺	陶器	碗	—	4.4	—	底部、高台部	底部	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	良好	江戸
12	右種岡辺	陶器	碗	—	5.6	—	底部、高台部	底部	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	良好	江戸
13	右種岡辺	陶器	天目茶碗	—	4.6	—	底部、高台部	底部	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	良好	中世
14	右種岡辺	土製品	長さ	<3.2>	1.0.1.5	—	厚み	ナデ	—	—	—	—	—	—	良好	中世
15	右種岡辺	瓦	長さ	<5.1>	<4.8>	—	厚み	—	—	—	—	—	—	—	良好	近世以降
16	右種岡辺	瓦	長さ	<5.0>	<5.6>	—	厚み	—	—	—	—	—	—	—	良好	近世以降
17	SD1	須臾器	裏	—	<4.0>	—	体部	体部	ケズリ	ケズリ	ケズリ	ケズリ	ケズリ	ケズリ	良好	中世
18	SD1	土師器	坏	—	(7.0)	—	底部～体部	底部回転糸切り	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	良好	中世
19	SD1上面礫	陶器	皿	(14.0)	—	<1.5>	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	良好	17世紀
20	SD1上面礫	土製品	炉体	長さ	<5.5>	<3.7>	厚み	厚み	被熱	被熱	被熱	被熱	被熱	被熱	良好	中世
21	SD1	金属	鉄滓	長さ	<11.9>	<8.2>	厚み	厚み	—	—	—	—	—	—	—	—
22	SD2上面礫	須臾器	裏	—	<4.4>	—	体部	体部	ケズリ	ケズリ	ケズリ	ケズリ	ケズリ	ケズリ	良好	中世
23	SD2上面礫	土器	かわらけ	—	6.0	1.5	底部3/4～体部	底部	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	良好	中世
24	SD2(暗葉)	土器	かわらけ	—	(6.0)	<1.2>	底部	底部	底面外周ケズリ	底面外周ケズリ	底面外周ケズリ	底面外周ケズリ	底面外周ケズリ	底面外周ケズリ	良好	中世
25	SD2(暗葉)	土器	かわらけ	—	(4.6)	<1.7>	底部	底部	底面外周ケズリ	底面外周ケズリ	底面外周ケズリ	底面外周ケズリ	底面外周ケズリ	底面外周ケズリ	良好	中世
26	SD2(暗葉)	土器	かわらけ	—	<3.1>	—	口縁部～体部	口縁部	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	良好	中世
27	SD2(暗葉)	陶器	碗	(12.0)	(8.0)	2.5	口縁部～高台部	口縁部	灰釉	灰釉	灰釉	灰釉	灰釉	灰釉	良好	中世
28	SD2(暗葉)	土師質土器	火鉢	—	<4.2>	—	口縁部～体部上	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	良好	中世
29	SK4	土師質土器	鉢	—	<1.7>	—	口縁部	口縁部	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	良好	中世

表 10 遺物観測表 (2)

埋蔵 番号	出土地点 位置	種別	器種	法量 (cm), () は復元 値、< > は現存値		部位	器形・調整の特徴		色調		胎土	焼成	備考
				口径	底径		器高	底厚	外周	内面			
30	I区	土器	かわらけ	—	(4.0)	<1.7>	底部	外周 底部は回転系切り後外周をナ テ。薄手。	内面	外周 7.5YR6/6 橙	密 雲母、長石	良好	中世
31	II区	青磁	碗	—	(7.4)	<1.4>	高台部	内湾		外周 10Y8/1 灰白 (地) 10Y8/1 灰白 (地) 10Y5/2 オリーブ灰	密	良好	
32	II区	土器	かわらけ	(12.0)	—	<2.0>	口縁部～体部	ナテ		外周 7.5YR7/8 黄褐	密 赤色粒、雲母、長石	良好	中世
33	II区	土師質土器	鉢 or 鍋	—	—	<3.2>	体部	ケズリ、ナテ 摩耗		外周 7.5YR5/6 明褐	密 細砂粒、赤色粒、雲 母、長石	良好	
34	II区	瓦		長さ <7.5>	幅 <4.0>	厚み 1.4				外周 N4/0 灰	密	良好	近世以降
35	II区	瓦		長さ <4.8>	幅 <4.8>	厚み 1.6				外周 N4/0 灰	密	良好	近世以降
36	II区	瓦		長さ <5.8>	幅 <17.5>	厚み 1.9				外周 10Y3/1 オリーブ黒	密	良好	近世以降
37	II区	瓦		長さ <6.8>	幅 <7.2>	厚み 1.6				外周 10Y3/1 オリーブ黒	密	良好	近世以降
38	トレンチ7	白磁	碗	—	—	<2.0>	高台部			透明釉 (白)	密	良好	
39	トレンチ7	陶器	天目茶碗	—	—	<2.8>	体部	ロクロ。上部に鉄軸。		透明釉 (白) 10YR7/4 にふい黄橙	密	良好	
40	トレンチ3	土師質土器	甕	—	—	<3.0>	口縁部～体部	ヨコナテ		外周 7.5YR6/6 橙	密 細砂粒、赤色粒、雲 母、長石	良好	
41	トレンチ4	土器	かわらけ	(11.0)	—	<1.1>	口縁部～体部	ロクロ		外周 7.5YR6/6 橙	密 赤色粒、雲母、長石	良好	中世
42	トレンチ4	土器	かわらけ	—	(8.0)	<1.5>	底部～体部	ナテ		外周 10YR6/4 にふい黄橙	密 赤色粒、雲母、長石	良好	中世
43	トレンチ4	かわらけ	碗	(12.0)	—	<3.2>	口縁部～体部	ヘラナテ (ケズリ?)		外周 5Y6/1 灰	密 細砂粒、長石	良好	外・内面から鈎のみ検出
44	トレンチ4	土器	搦鉢	—	—	<5.5>	体部			外周 7.5YR6/6 橙	密 細砂粒、赤色粒、雲 母、長石	良好	
45	トレンチ4	陶器	碗	—	—	<2.5>	口縁部～体部	ロクロ。鉄軸		外周 10YR1/7/1 黒	密	良好	戦国期
46	トレンチ4	陶器	碗	—	(8.0)	<1.4>	底部	灰軸		外周 5Y7/3 浅黄	密	良好	大塚 16 世紀末
47	トレンチ 11	土師器	坏蓋	(12.0)	—	<0.5>	口縁部			外周 7.5YR6/6 橙	密 長石、雲母	良好	
48	トレンチ 5サ フトレ	須恵器	坏蓋	—	—	<1.2>	天井部 (桶みの 根本)～体部	ロクロ		外周 N6/0 灰	密	良好	
49	トレンチ 5サ フトレ	土器	かわらけ	(12.0)	(8.0)	2.6	口縁部～体部	底部外周をやや丁寧なナテ。 中心部はやや粗いナテ。		外周 7.5YR6/6 橙	密 細砂粒、赤色粒、雲 母、長石	良好	中世
50	トレンチ 5サ フトレ	土器	かわらけ	(6.8)	(4.0)	1.7	口縁部～底部	回転系切り、外周ナテ		外周 5YR6/6 橙	密 赤色粒、雲母、長石	良好	中世
51	トレンチ 5サ フトレ	土師質土器	甕	—	—	<2.6>	口縁部			外周 10YR3/2 黒褐	密 赤色粒、雲母、長石	良好	
52	トレンチ 5サ フトレ	金属	釘	長さ 1.0	0.7	厚み 0.7							
53	トレンチ 5サ フトレ	土師質土器	甕?	—	(6.0)	<1.2>	底部	ナテ		外周 5YR6/6 橙	密 細砂粒、赤色粒、雲 母、長石	良好	
54	トレンチ 2	須恵器	甕	—	—	<2.7>	体部	ロクロ		外周 N5/0 灰	密	良好	
55	トレンチ 2	土師質土器	甕?	—	(8.0)	<1.2>	底部	ナテ 摩耗		外周 5YR6/6 橙	密 細砂粒、赤色粒、雲 母、長石	良好	
56	トレンチ 2	瓦	—	長さ <5.0>	幅 <7.1>	厚み 1.7	—	—		外周 2.5GY6/1 オリーブ灰	密	良好	近世以降

写真図版

武田氏館跡



写真図版1

発掘中の遺跡
←

1. 調査区遠景 武田氏館跡を望む（南東から）



2. 調査区（Ⅲ区） 石積みと現在の路地（北から）

(南)



(北)

3. 調査区全景（上から）



4. 調査区全景（南西から）



5. 調査区全景（南東から）



6. III区全景（西から）



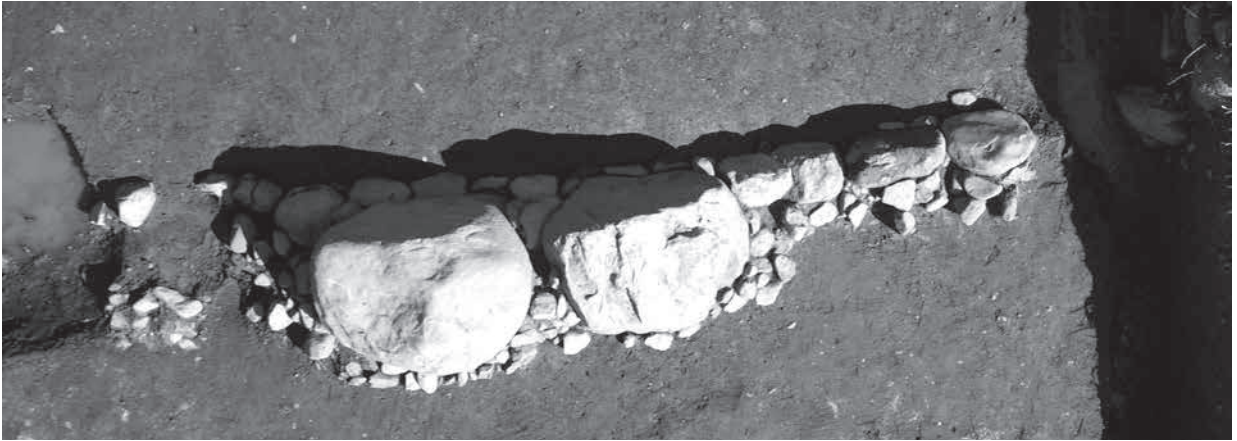
7. 石積み・石列全景（南東から）



8. 石積み全景（北東から）



9. 石積み全景（北から）



10. 石積み (真上から)



11. 石積み正面 (東から)



12. 石積み裏込め (南西から)



13. 石列 (東から)



14. III区北壁土層断面



15. III区東壁土層断面



16. III区南壁土層断面1



17. III区南壁土層断面2



18. III区北東隅石列検出状況（東から）



19. III区北東隅石列検出状況（北から）



20. 石積み前サブトレンチ全景（北から）



21. 石積み前サブトレンチ東側（北から）



22. 石積み前サブトレンチ西側（北から）



23. II区北壁土層断面（南西から）



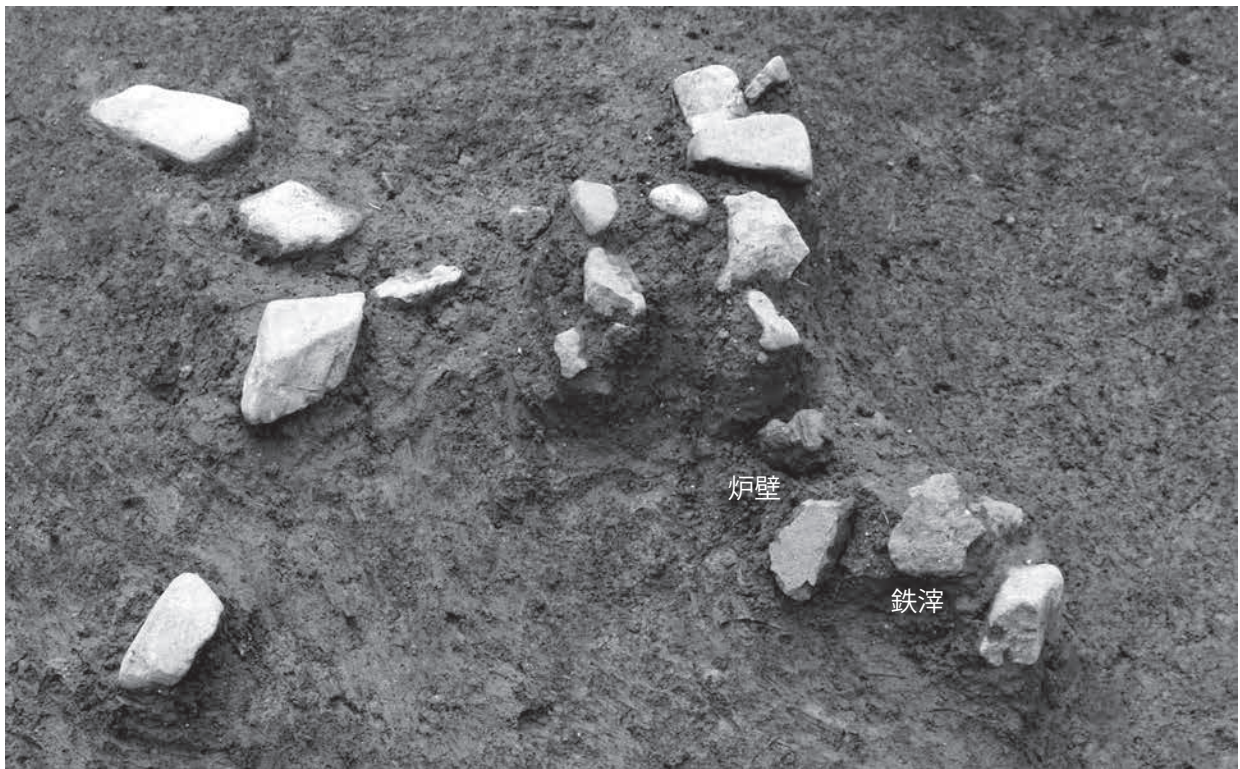
24. II区南壁土層断面（北東から）



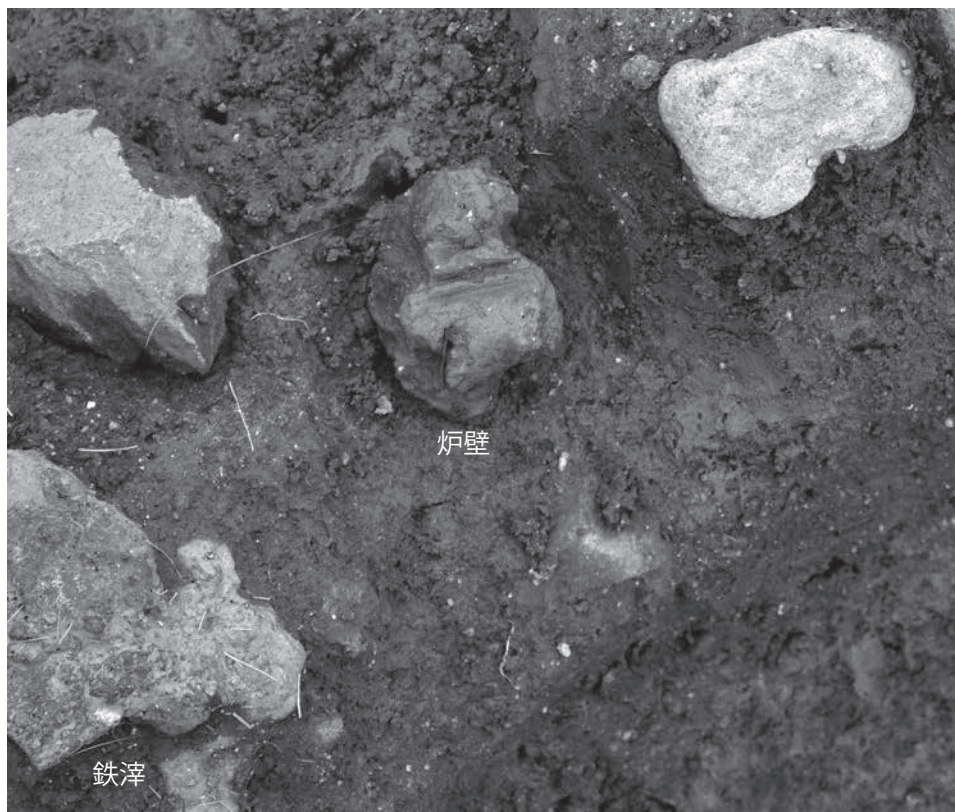
25. 1号溝状遺構上面の礫（南から）



26. 1号溝状遺構上面の礫（南東から）



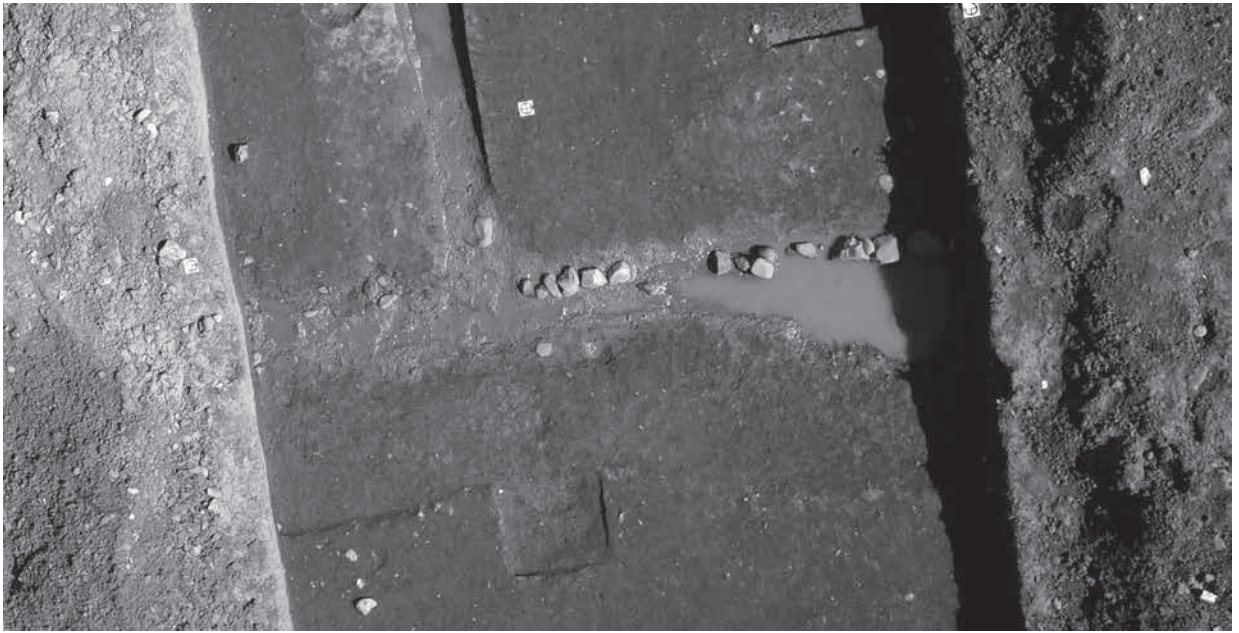
27. 1号溝状遺構上面の礫中から出土した鉄滓と炉体（1）（北から）



28. 1号溝状遺構上面の礫中から出土した鉄滓と炉体（2）（西から）



29. 1号溝状遺構北壁土層断面



30. 1号溝状遺構（西上空から）



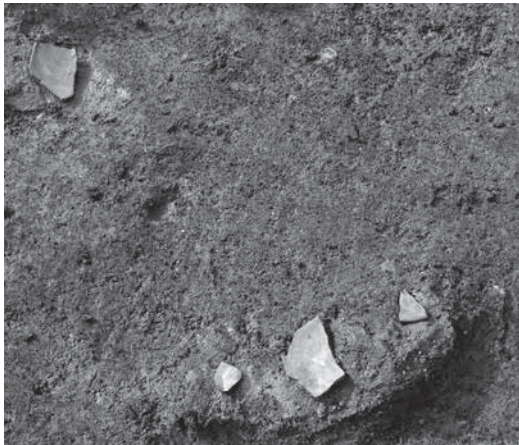
31. 1号溝状遺構内から検出した石列（南西から）



32. 2号溝状遺構上面の礫（北から）



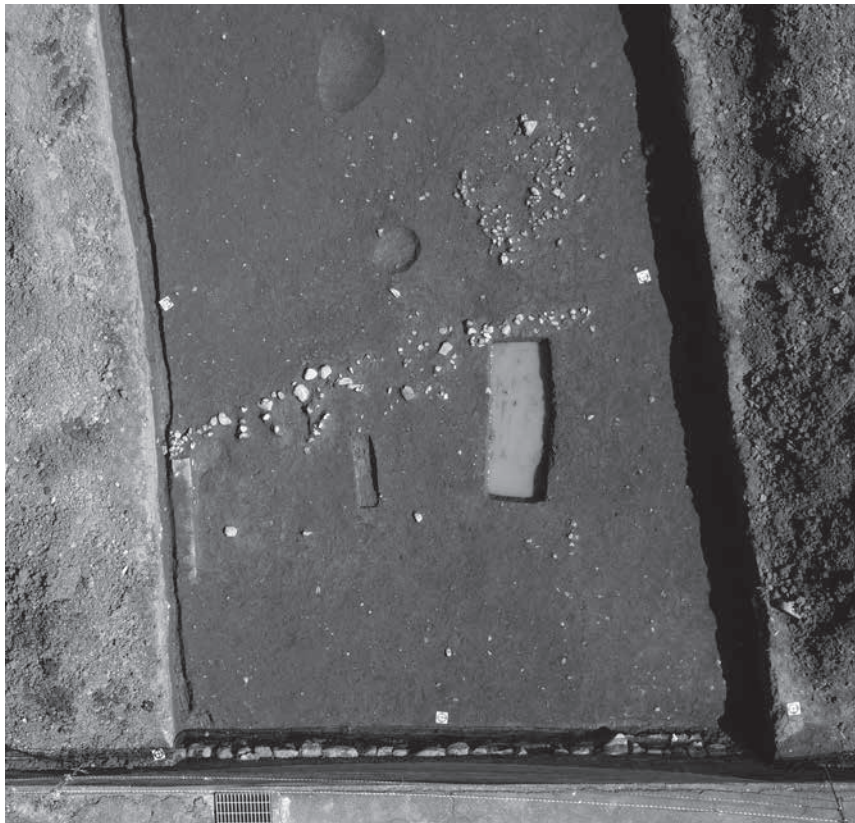
33. 2号溝状遺構上面の礫（東から）



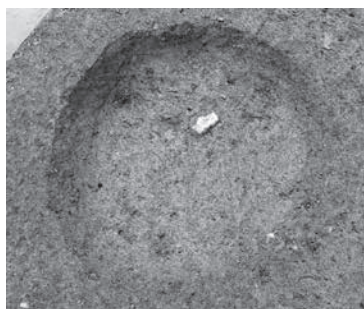
34. 2号溝状遺構遺物出土状況（南東から）



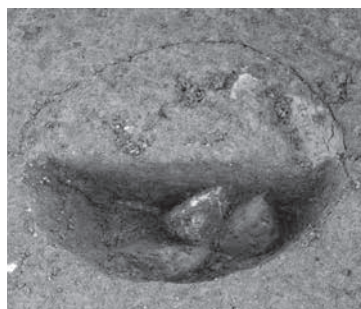
35. 2号溝状遺構（暗渠）北壁土層断面



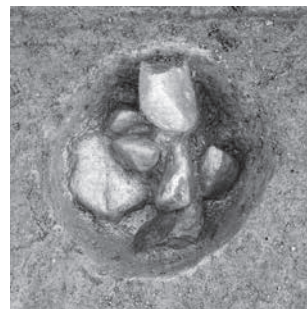
36. 2号溝状遺構（暗渠）（西上空から）



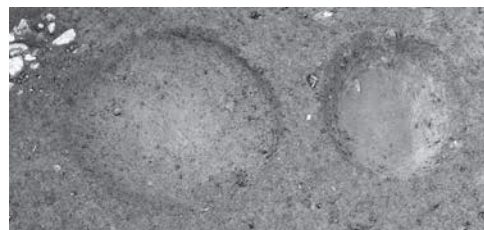
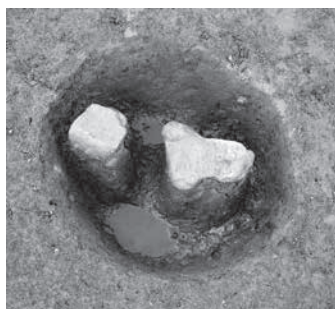
37. SK6 (北東から)



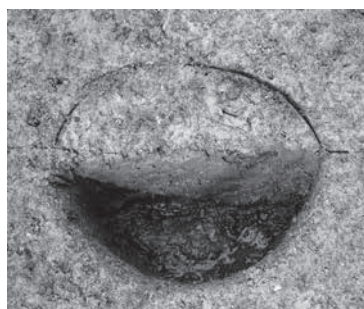
38. SP4 土層断面と礫検出状況 (北東・北西から)



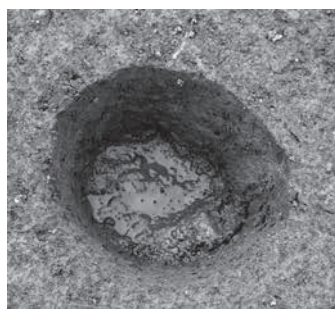
39. SP5 土層断面と礫検出状況 (北東・南西から)



40. SP7 (左)・SP6 (南東から)



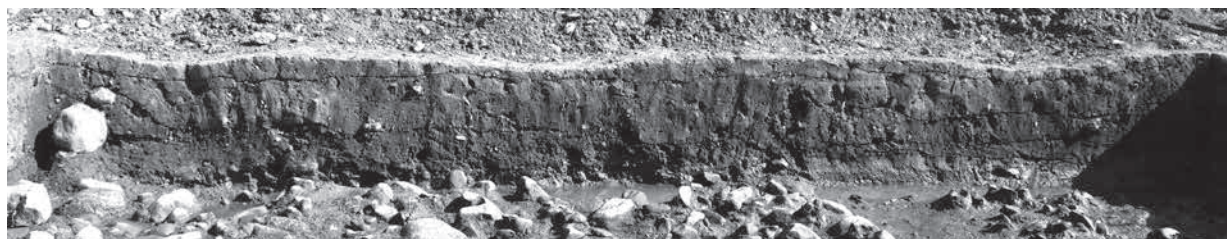
41. SP8 土層断面 (東から)



42. SP9 (東から)



43. I区西壁土層断面



44. I区北壁土層断面



45. I区全景（西上空から）

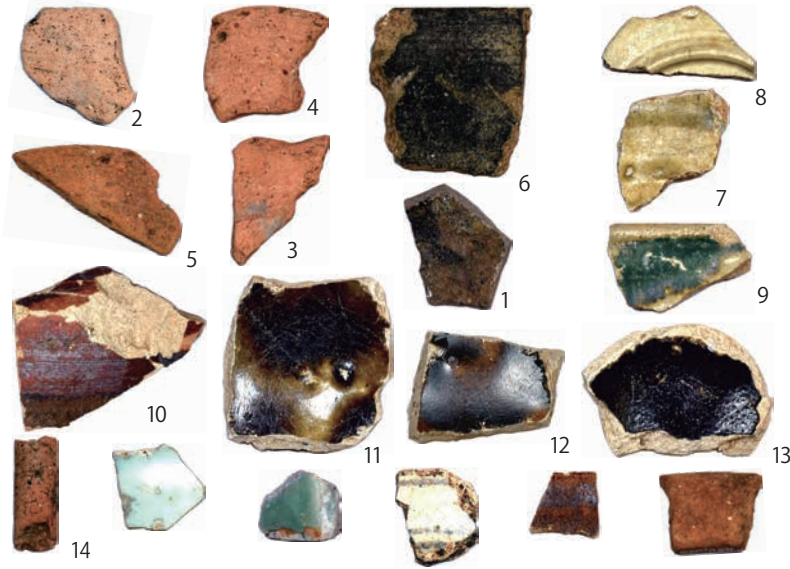


46. 作業風景

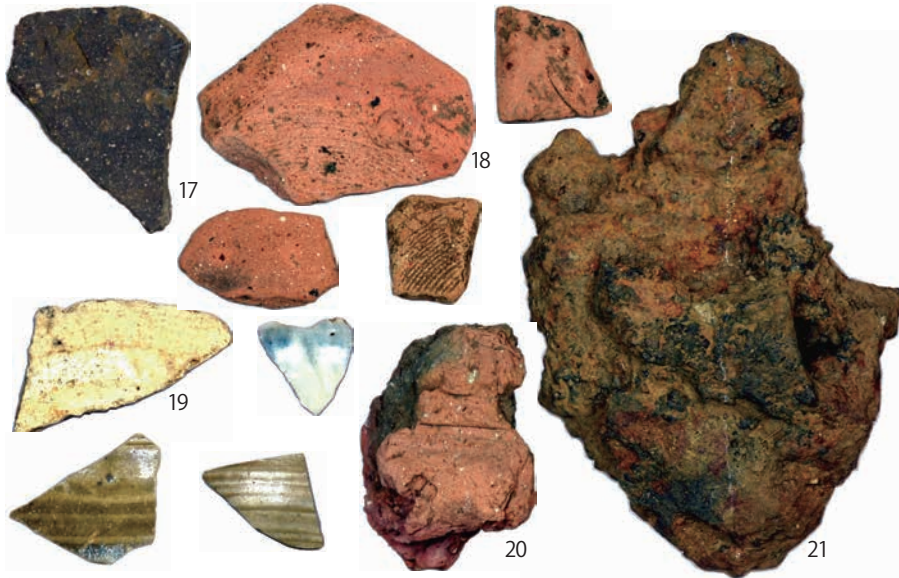


47. 北東中学校現場見学会

石積み周辺から出土した遺物



SD1 から出土した遺物



SD2 から出土した遺物

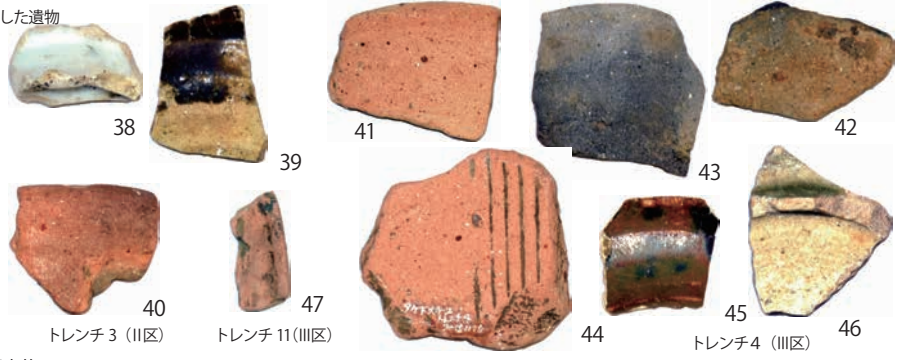


番号が無いものは一括遺物である。

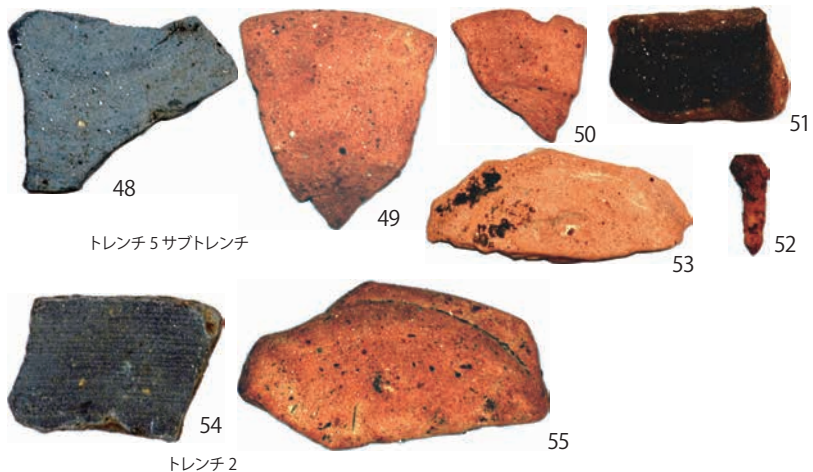
遺構外から出土した遺物
I区



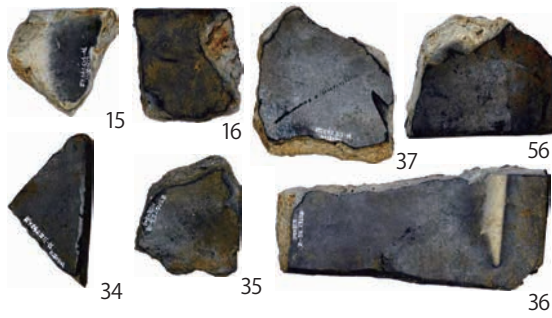
確認調査で出土した遺物
トレンチ7 (I区) から出土した遺物



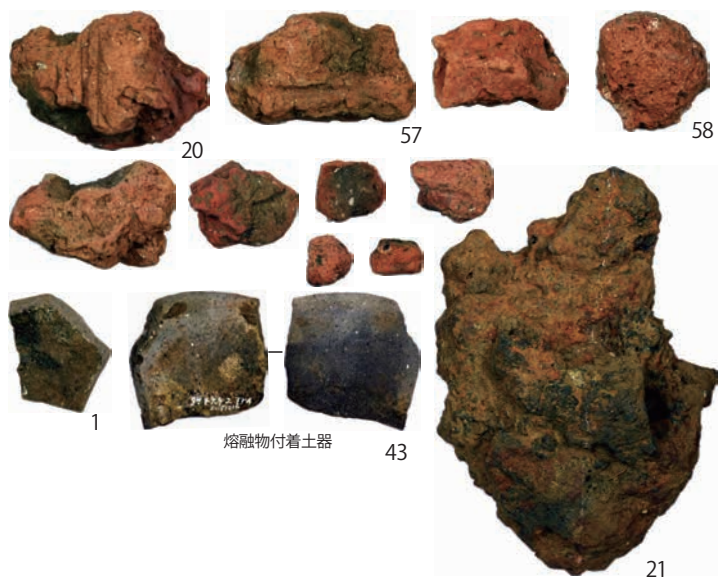
確認調査で出土した遺物



瓦



鍛冶関係遺物 (前掲載写真を含む)



番号が無いものは一括遺物である。

報告書抄録

フリガナ	タケダジョウカマチイセキジュウ (コウフシオオテニチョウメ 4049 バン ホカチテン)							
書名	武田城下町遺跡X (甲府市大手二丁目 4049 番 他地点)							
副書名	宅地造成に伴う発掘調査報告書							
編著者名	志村憲一 (甲府市教育委員会)・小谷亮二・萩野谷主税 (昭和測量株式会社)							
編集機関	昭和測量株式会社							
所在地	〒 400-0032 山梨県甲府市中央 3-11-27 TEL 055-235-4448							
発行年月日	西暦 2017 (平成 29) 年 3 月 31 日							
フリガナ	フリガナ	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				(㎡)	
タケダジョウカマチイセキ 武田城下町遺跡 コウフシオオテニチョウメ (甲府市大手二丁目 4049/バンホカチテン 4049 番 他地点)	ヤマナシケン 山梨県 コウフシオオテニチョウメ 甲府市大手二丁目 4049 バンホカ 4049 番他	19201	272	35° 40' 49"	138° 34' 41"	20160225 ~ 20160326	205	宅地造成・ 区画整理
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
武田城下町遺跡 (甲府市大手二丁目 4049 番他)	城下町	平安		須恵器		遺構は確認されなかつた。		
		中世	石積み・石列1条、 溝跡1条、暗渠1 条、土坑8基、ピッ ト11基	青磁、白磁、天目茶碗、陶器、か わらけ (熔融物付着1点)、鉄滓、 鑊羽口、炉体		屋敷境と思われる石積 み・石列が検出された。 鍛冶工房にかかわると思 われる熔融物が付着した かわらけ、鉄滓、鑊羽口、 炉体が検出された。		

甲府市文化財調査報告 93

武田城下町遺跡X (甲府市大手二丁目 4049 番 他地点)

—宅地造成に伴う発掘調査報告書—

発行日 平成 29 年 3 月 31 日

編集 昭和測量株式会社

〒 400-0032 山梨県甲府市中央 3-11-27 TEL 055-235-4448

発行 有限会社竜王土地

甲府市教育委員会

昭和測量株式会社

印刷・製本 株式会社 内田印刷所

〒 400-0032 山梨県甲府市中央 2-10-18 TEL 055-233-0188
